

第12回 ふるさと名取の歴史展

名取熊野三山信仰の歴史と背景



期間：平成21年10月15日（木）から
平成21年11月11日（水）まで

場所：名取市文化会館2階 展示ギャラリー

●記念講演会 平成21年10月24日（土）
14：00から 文化会館中ホール

●同時開催 新宮市教育委員会

熊野新宮「蓬萊山の御正体」展



① はじめに

あいさつ

本市は、県内屈指の文化財の宝庫として知られ、特に東北最大の規模を誇る史跡雷神山古墳をはじめとする古墳文化と、高館を中心とする中世以降の名取熊野三山信仰関係の文化財に特色があります。

当教育委員会においては、毎年文化財の普及活用の一環として、「文化財保護強調週間」及び「教育・文化月間」に合わせ、『ふるさと名取の歴史展』を開催しております。

今年度で第12回目となりますが、今回は、昨年和歌山県新宮市と姉妹都市を締結したことを受け、両市の縁ともなりました熊野信仰をテーマに『名取熊野三山の歴史と背景』の開催と同時に、“世界遺産”熊野新宮『蓬莱山の御正体』として、新宮市のご好意により貴重な資料を展示して頂けることとなりました。これを機会に熊野信仰の歴史と、ふるさとの歩みに親しんで頂ければ幸いです。

最後に、今回の歴史展の開催にあたり、宮城県教育庁文化財保護課、東北歴史博物館、新宮市をはじめ、ご協力ご指導を賜りました関係各位に対しまして、感謝と御礼を申し上げます。

平成21年10月

名取市教育委員会
教育長 丸山 春夫

くまのしんこう

②熊野信仰とは

紀州の熊野三山信仰

紀州(和歌山県)熊野の地は、古くから自然信仰の聖地・靈地として尊崇の対象で特別な地域とされてきました。

熊野三山の内、最も古いとされる本宮大社は家津御子神、速玉大社(新宮大社)は熊野川の下流にあり速玉神、那智大社は飛龍権現ともいわれ、那智の大滝を御神体として古くから行者の修行の場でありましたが、後に夫須美神を祀っています。

熊野三山信仰が盛んになり、特に平安末期頃、仏教と神道の神仏習合に浄土信仰が結びついて発展し、熊野の場合は、本宮社の神=阿弥陀如来、新宮社の神=薬師如来、那智社の神=千手観音と同一とされ、三尊が集まる浄土とされるようになりました。

このようにして、熊野三山には熊野三所制度が確立し、熊野山伏や先達によって熊野信仰が広がっていきました。



くまのほんぐう たいしや
熊野本宮大社



おおゆのはら
大齋原の大鳥居（旧本宮社跡）



くまのはやたまたいしや
熊野速玉大社



はやたまたいしゃ なぎ
速玉大社の榎木の木



くまのなちたいしゃ
熊野那智大社



那智の滝(青岸渡寺から望む)



せい がん と じ
青 岸 渡 寺

くまのしんこう

③東北の熊野信仰

1. 【東北地方への熊野信仰の広がり】

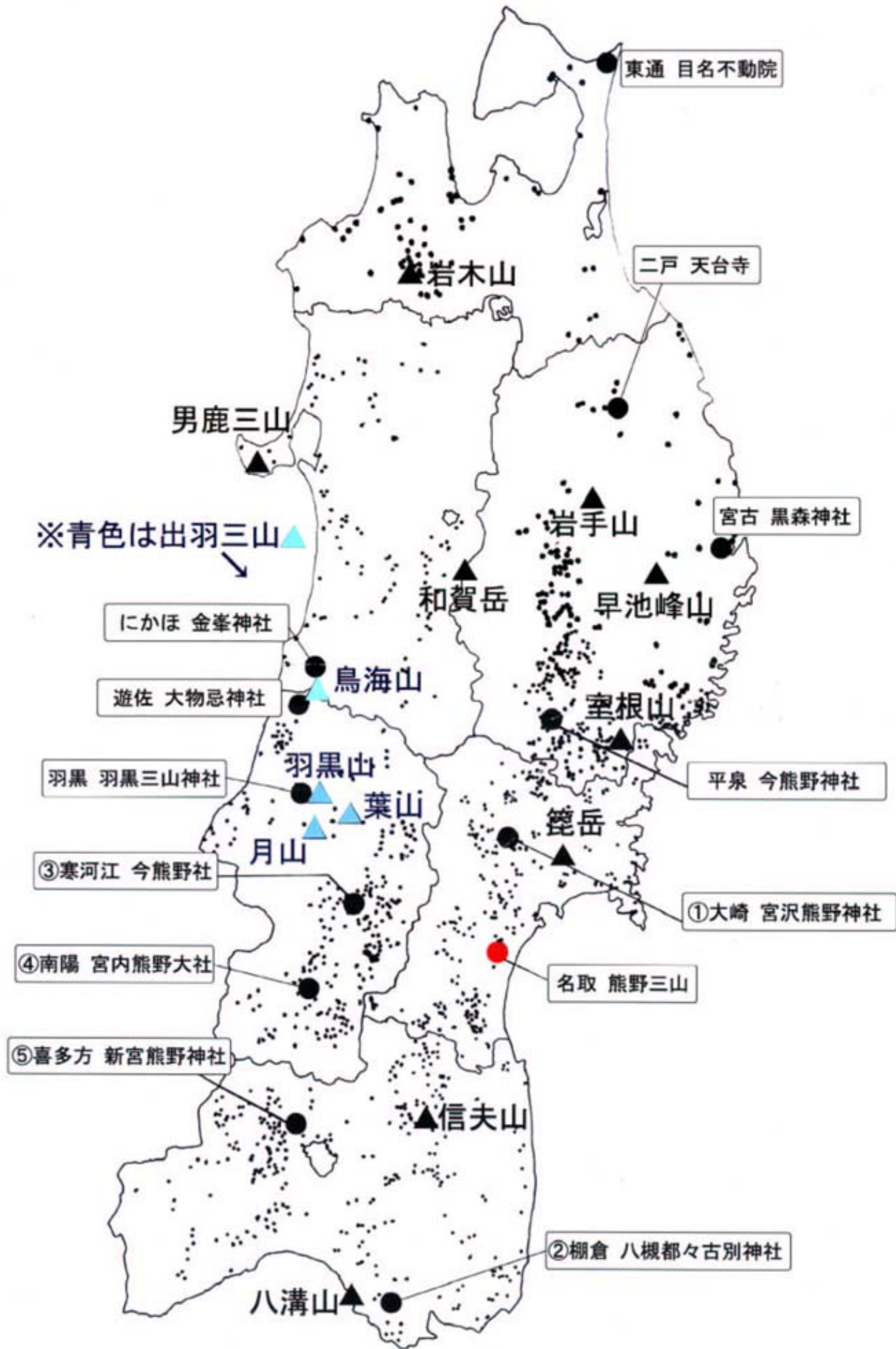
平安時代の終り頃（11世紀末頃）になると、熊野信仰は熊野から都、都から全国へと広がって行きました。紀州熊野三山は中央からの距離も近く、当時の権力者達の多くがお参りした事や、女性も受け入れるなど開放的であった事、熊野三山にお参りするだけで、現在と死後の世界での幸せが約束されると考えられた事などにより、身分の上下にかかわらず圧倒的な人気を集め、熊野三山へのお参りはアリの行列にたとえられる程、盛んになりました。

東北地方でもこの頃に熊野信仰が本格的に受け入れられ、各地に熊野神社が祀られるようになりました。当初は、主に皇族や地方の有力者などが自分の領地や身近な寺院の境内などへ祀る場合が多かったようですが、鎌倉時代（12世紀）以降になり、関東の武士達が東北各地に領地を得たり移住したりする中で、さらに多くの熊野神社が祀られるようになりました。

くまのじんじゃ で わさんざんしんこう

2. 【東北の熊野神社と出羽三山信仰】

現在、全国には3,000ヶ所を超える^{くまの}熊野ゆかりの神社があると言われていま
す。その内の約4分の1が東北地方にあると言われており、北は青森県の北部
にまで広がっています。^{きしゅうくまのさんざん}紀州熊野三山から遠く^{はな}離れているにもかかわらず、
^{くまのしんこう}熊野信仰が東北地方の人々に受け入れられ、あつく^{しんこう}信仰されていた事が分かり
ます。また、主に日本海側では、^{で わさんざんしんこう}出羽三山信仰と深く結び付きながら^{くまのしんこう}熊野信仰
が^{じゅうよう}受容されたと言われています。^{で わさんざん}出羽三山とは、古代以来、^{しんこう}信仰の拠点として
あつく^{そんすう}尊崇を集めた、^{えんがん}山形県^{しょうないへいや}日本海沿岸の庄内平野と^{むらやまぼんち}内陸部の村山盆地との間
に^{つら}連なる^{はぐろさん}羽黒山・^{がっさん}月山・^{はやま}葉山の^{さんざん}三山と、^{しょうないへいや}庄内平野北側の秋田県境にそびえる
^{ちょうかいさん}鳥海山の四名山の総称で、これに対する^{しんこう}信仰が^{で わさんざんしんこう}出羽三山信仰です。^{むらやまぼんち}村山盆地で
は^{ちょうかいさん}鳥海山に代わり^{はやま}葉山（^{すいたい}近世以降衰退して^{ゆどのさん}湯殿山が入る）を、^{しょうないへいや}庄内平野では
^{ちょうかいさん}鳥海山を^{はぐろさん}羽黒山・^{がっさん}月山と組み合わせて三山としていました。



【東北の熊野神社の分布と主な寺社】

くまのじんじゃ

【各地の熊野神社】

熊野^{くまのしんこう}信仰は、仏教^{しゅげんどう}や修験道、地域にあるシンボリックな山に対する信仰などと結び付き、その地方の状況にあわせて変化しながら広まっていったようです。各地で信仰の対象となっていた山の周囲や、主要な河川・街道沿いなどには、熊野^{くまのしんこう}信仰を広めるための重要な寺社が造られ活動の拠点となっていました。名取熊野三山もこうした寺社の1つであると考えられています。こうした寺社には、熊野^{くまのしんこう}信仰にかかわる仏像^{みしょうたい}や御正体（詳しくは「⑤名取の熊野三社 熊野那智神社について」をご覧ください）などが遺^{のこ}されています。東北地方では、熊野の神は、神像^{しんぞう}・仏像よりも御正体^{みしょうたい}として遺^{のこ}されている場合が圧倒的に多いと言われています。ここでは、熊野^{くまのしんこう}信仰の拠点となった寺社の内、主に東北南部のものをご紹介します。

おおさきしふるかわ みやざわいまくまのじんじゃ
【①大崎市古川 宮沢新熊野神社】

おおさき しふるかわみやざわ いまくまのじんじゃ かまくらぼくふ せいし あづまかがみ
大崎市古川宮沢の新熊野神社は、鎌倉幕府の正史である『吾妻鏡』によれ
ぶんじ がんねん おうしゅうふじわらさんだひでひら ぞうえい ゆいしょ
ば、文治元年(1185)に奥州藤原三代秀衡の命により造営されたとされる由緒
ある神社です。同社の御神体は、鏡板が直径約 45 cmの大きさを誇る阿弥陀
ごしんたい きょうばん ほこ あみだ
如来坐像御正体で、現在は失われていますが、阿弥陀如来坐像の周囲には 12
よらいざぞうみしょうたい あみだによらいざぞう
体の像が取り付けられていたと考えられます。



いまくまのじんじゃ
【宮沢 新熊野神社】



東北歴史博物館
熊野信仰と東北展図録 より転載

あ み だ に よ ら い ざ ぞ う み し ょ う たい
【阿弥陀如来坐像御正体】

たなぐらまち やづき つ つ こわけじんじゃ 【②棚倉町 八槻都々古別神社】

ふくしまけんたなぐらまちやづきおおみや やづき つ つ こわけじんじゃ
福島県棚倉町八槻大宮に所在する八槻都々古別神社は、平安時代に作られた
えんぎしき しきないしや やみぞさんとうろく くじがわぞ
「延喜式」にも記載されている式内社で、八溝山東麓の久慈川沿いに位置して
います。農耕の神を祀る^{まつ}古社であり、9世紀には成立していた事が知られてい
ます。交通の面でも重要な位置にあった事から、中世には八築宿^{やづきのしゆく}と呼ばれる
しゆくえき くじがわぞ たなぐらまちあざぼば
宿駅として発展しました。近世には、同じ久慈川沿いに所在する棚倉町字馬場
の馬場都々古別神社（上之宮）、茨城県大子町下野宮にある近津神社（下之宮）
ちかつさんしや きゅうしやごう ちかつだいみょうじん
をあわせて近津三社と呼ばれていました。旧社号を近津大明神とし
おうしゅういちのみや しょう
奥州一宮を称して広く民衆の信仰の対象となっていました。

もくぞうじゅういちめんかんのりつぞう どうはち しやほう
木造十一面観音立像・銅鉢などの社宝は国の重要文化財に、旧暦1月6日
おたうえまつり かぐら おたうえまつり
の御田植祭の神楽「御田植祭」は、室町時代以前から行われていたとされ、
国の無形民俗文化財に指定されています。



やづき
【八槻

つ つ こ わ け じ ん じ ゃ
都々古別神社】



ば ば
【馬場】

つ つ こ わ け じ ん じ ゃ
都々古別神社】



しものみや
【下野宮】

ちかつじんじゃ
【近津神社】

さがえし じおんじいまくまのじんじゃ 【③寒河江市 慈恩寺今熊野神社】

さがえし じおんじあざたざわ いまくまのじんじゃ ほんざんじおんじけいだい
山形県寒河江市慈恩寺字田沢に所在する今熊野神社は、本山慈恩寺境内に並び
こんりゅう じおんじ しょうむてんのう ちよくがん ばらもんそうじょう
建立されています。慈恩寺は、奈良時代に聖武天皇の勅願により波羅門僧正が
かいざん いんせい き とぼじょうこう ちよくがん さいこう ぶんじ ごしらかわ
開山し、院政期には鳥羽上皇の勅願で再興、文治元年(1185年)には後白河
じょうこう みなもとのよりと も こうしゅん あじゃり こさつ
上皇・源頼朝の命により、公俊阿闍梨なる僧が再建したとされる古刹で、
はやましんこう いまくまのじんじゃ ほうげん
葉山信仰と関わりの深い寺院です。今熊野神社は、保元元年(1156年)に
ごしらかわじょうこう ちよくがん まつ ぶんじ じょうこう
後白河上皇の勅願により祀られ、文治2年(1186年)に上皇から重ねての命があ
じおんじ こうしゅん あじゃり こんりゅう いちざん ちんじゅ
り、慈恩寺と同じく公俊阿闍梨により建立され、一山の鎮守としたとされてい
ます。慈恩寺には多くの文化財が遺されており、国の重要文化財に指定されてい
もくぞう あみだにょらいざぞう もくぞう きしもんじゅぼさつ わきじぞう
る木造阿弥陀如来坐像や木造騎獅文殊菩薩・脇侍像などを始めとする多くの仏像
どうせいおんじ き しょうかんのんぼさつざぞうみしょうたい みしょうたい
や、鎌倉時代の銅制御食器、写真の聖観音菩薩坐像御正体の他にも3面の御正体
じおんじ なとりくまのさんしゃ
などがあります。慈恩寺は、名取熊野三社との関わりがとても深い寺院です。



じおんじ
【慈恩寺】

いまくまのじんじゃ
【今熊野神社】



じ おん じ
【慈 恩 寺】



東北歴史博物館
熊野信仰と東北展図録 より転載

しょうかんのんぼさつざぞうみしょうたい
【聖 観音菩薩坐像御正体】

【④南陽市 宮内熊野大社】

山形県南陽市に所在する宮内熊野大社は、置賜盆地北端の端山に鎮座しており、盆地を一望する景勝地にあります。江戸時代の記録によれば、平安時代前期の大同元年(806年)または大同二年(807年)に開創されたとされ、遺された文化財からも古くから信仰の拠点として尊崇を集めた事が容易に想像されます。同大社には中世から近世にかけての11面の御正体が遺されており、写真の熊野三山御正体は、応永17年(1410年)の銘を有する直径約82cmと非常に大きなものです。



みやうち
【宮内】

くまのたいしゃはいでん
【熊野大社拝殿】



みやうち
【宮内

くまのたいしゃほんでん
熊野大社本殿】



東北歴史博物館
熊野信仰と東北展図録 より転載

くまのさんざんみしょうたい
【熊野三山御正体】

きたかたしけいとく 【⑤喜多方市慶徳

しんぐうくまのじんじゃ 新宮熊野神社】

福島県喜多方市慶徳町に所在する新宮熊野神社は、元禄15年(1702年)に記された『新宮雑葉記』によると、天喜3年(1055年)に、源頼義・義家父子が会津川東町熊野堂に熊野三社を祀り、応徳3年(1085年)後三年合戦の折に源義家が、その内の新宮を小松村(後の新宮村)に遷座した事に始まるとされる。この時、同時に熊野本宮社を岩沢村(喜多方市上三宮町)、熊野那智社を宇津野村(喜多方市熱塩加納町宇津野)に遷座・造営したが、後に両社とも新宮社に遷され、現在も同社に祀られている。境内には鎌倉時代初期頃に作られたとされ、国の重要文化財にも指定されている長床(拝殿 桁行約27m)が、また、神社の北東側の河岸段丘上の平坦地には、鎌倉時代に新宮庄を治めた新宮氏の居城である新宮城があります。新宮氏は、暦応4年(1341年)に銅鉢、貞和5年(1349年)に銅鐘、康応2年(1390年)に銅製鰐口をそれぞれ熊野神社に奉納しています。その他、同社には平安時代中期頃のものとされる6体の神像、慈覚大師円仁の作とされる薬師如来坐像、文殊菩薩騎獅像、写真の南北朝時代のものとされる鉄製御正体など多くの文化財が伝わっています。



けいとく
【慶徳

しんぐうくまのじんじゃながとこ はいでん
新宮熊野神社長床(拝殿)】



けいとく
【慶徳

しんぐうくまのじんじゃほんでん
新宮熊野神社本殿】



東北歴史博物館
熊野信仰と東北展図録 より転載

あみだによらい によらいざぞうみしょうたい
【鉄製阿弥陀如来・二如来坐像御正体】

3. 【東北各地の熊野と名取熊野三山】

なとりくまのさんざん くまのしんこう
名取熊野三山は、東北各地の熊野信仰に関わる寺社との間に活発な交流があった事も知られています。

鎌倉時代の安貞3年(1229)から寛喜2年(1230)までの2年間に行なわれた、
くまのしんぐうじいっさいきょう しゃきょう でわのくにじおんじ
熊野新宮寺一切経の写経に際しては、出羽国慈恩寺を中心として、数百巻に
およぶ平安期の経巻きょうかんを移入した事が一切経いっさいきょうに押された印により知られていま
す。一切経中にはこの他にも、陸奥国分寺西院(仙台市)、深江保瓦山別処之住人
そうげつえんぼうえいしゅう ものおぐんかなんちょう す え みやぎぐんしおがまみやべ きょうかん
僧月円坊永秀(桃生郡河南町須恵)や宮城郡塩釜宮辺などと記された経巻が
あり、各地からの協力を得て写経事業が行なわれた事が分かります。また、
りっしやくじ ちょうかいさん あかう そほんごうやくしじ
立石寺や鳥海山周辺にあったと考えられている赤宇曾本郷薬師寺(秋田県
ゆりぐんいわしろまち きょうかん でわさんざん
由利郡岩城町付近か)などが関与した経巻もあり、出羽三山そのものの姿は見
えないが、出羽三山でわさんざんを取り巻く諸寺との関わりも伺うかがわれます。

无師子奮迅力佛

南无舍

吾男子善女人十日礼拜讀

離一切諸難及滅一切羅

无善說增上品勝佛

南无普

无過種種嚴對奮迅佛南无自

无量功德光明勝佛

南无

じおんじ

しんぐうじいっさいきょう

【慈恩寺の印のある新宮寺一切經】

一切經

出羽國

慈恩寺

辨不受後有

余將有一姑婆婆羅門突進關波婆羅
門住詣休所問評已託在一面坐所
託偈言

水鼓意板結內有姑婆不世間疑此結 誰有能除者
余將世壽後託偈言

明智整三我心備於智慧專精能勤學 年亦除結疑
時婆羅門復託偈言

及疑悉破結內有姑婆不甘結所結 誰能新除者
余將世壽後託偈言

眼可莫吾身及其於慧法名色都无餘 心意盡滅度
意証知是者新除於結疑 辨能眼松毛 六半講真靈
天教以權林 聚薪三孫危一結疑為十

別譯雜阿含經卷第十五

名取能野堂以立石寺本一文字
亂能破支于北古

此乃多上法論同入 執其語中其成修通

永七二一 一六八八 三三九〇

東北歴史博物館 熊野信仰と東北屋敷縁 より転載

りっしゃくじ しんぐうじいっさいきょう
【立石寺の名が見える新宮寺一切経】

※ 赤枠線部分の読み

名取熊野堂以立石寺本●●●

(別筆)
一交了

執筆顕光十地坊

※山寺立石寺の経卷をテキストとして、
顕光十地坊がこの経卷を書写した事が
記されています。

非徒護帝遜捨而不問竟以獲免劉代終之不
委斯由其潛潛吞秘章名如此凡誦大小品涅
槃般若法花十地金光明成實百論阿毘曇心
等各著義疏行世

續高僧傳卷第五

一文一觀

東晉三傳卷五 三月十日 僧麻打打身 生年 陸奥國分寺高良原

東北歴史博物館
熊野信仰と東北版図録より転載

む つ こく ぶん じ しんぐう じい っさい きょう
【陸奥国分寺の名が見える新宮寺一切経】

※ 赤枠線部分の読み

寛喜二年

大才
庚丑

壬二月十二日

申時
書了

僧摩訶衍房

生年
廿才也

●●●●●
陸奥国分寺西院住侶也

※寛喜二年（一二三〇年）

閏二月十二日の申時（午後

三時から五時）頃に、陸奥国分寺西院の僧侶である摩訶衍房（二十歳）が、この経巻を書写した事が記されていきます。

特に出羽慈恩寺との関係は深く、12世紀末から13世紀初め頃に製作されたと
される名取新宮寺文殊菩薩像(市指定)は、慈恩寺の木造騎獅文殊菩薩・脇侍像を
模したものとされている事や、名取熊野新宮社に伝わる熊野堂舞楽(県指定)を
伝えたと言われる大阪四天王寺の楽人である林家は、貞観2年(860年)に
慈覚大師円仁に従って山寺へ来て以来、山寺日枝・慈恩寺山王・平塩熊野の三
所の舞楽を司った楽人とされている事なども知られています。



【奥河江市の文化財】奥河江市より転載

じおんじ きづくりきしもんじゅほさつ わきじぞう
【慈恩寺 木造騎獅文殊菩薩・脇侍像】



じおんじぶがく
【慈恩寺舞楽】

たいへいらく
【太平楽】

また、熊野堂舞楽くまのどうぶがくについては、山形県高島町たかはたまちに所在する安久津八幡神社あくつはちまんじんじゃに残る明治時代の記録によると、同社の社人で舞楽師職ぶがくししきであった大地権太夫だいちごんだゆうの先祖が、往昔より名取熊野神社おうせき なとりくまのじんじゃ（旧新宮社しんぐうしゃ）の9月9日の例祭に舞楽師ぶがくしとして招待されており、その際には米沢領との境となる湯の原の駅まで迎えが来て、そこから熊野神社くまのじんじゃまでの通行の宿々では皆が競って乗馬けんを献じたと記されており、現在はありませんが近世以前にはそのような交流があったと思われます。この大地権太夫だいちごんだゆうは、山形県南陽市の宮内熊野大社なんようし みやうちくまのたいしゃに伝わる延年舞えんねんまいの舞師まいしで舞人様まいじんさまと呼ばれる人物でもありました。また、名取熊野本宮なとりくまのほんぐうに伝わる十二神鹿踊じゅうにじんししおどりは文安年間ぶんあん（1444～1449年）に山形県高島町付近とされる米沢屋代郷から山伏修験者たかはたまち やしろのごう やまぶししゅげんじゃにより伝えられたとされるもので、名取熊野なとりくまのとこれらの地域との深い関わりが伺うかがわれます。

くまのさんざん
名取の熊野三山

しんこう
信仰の成立

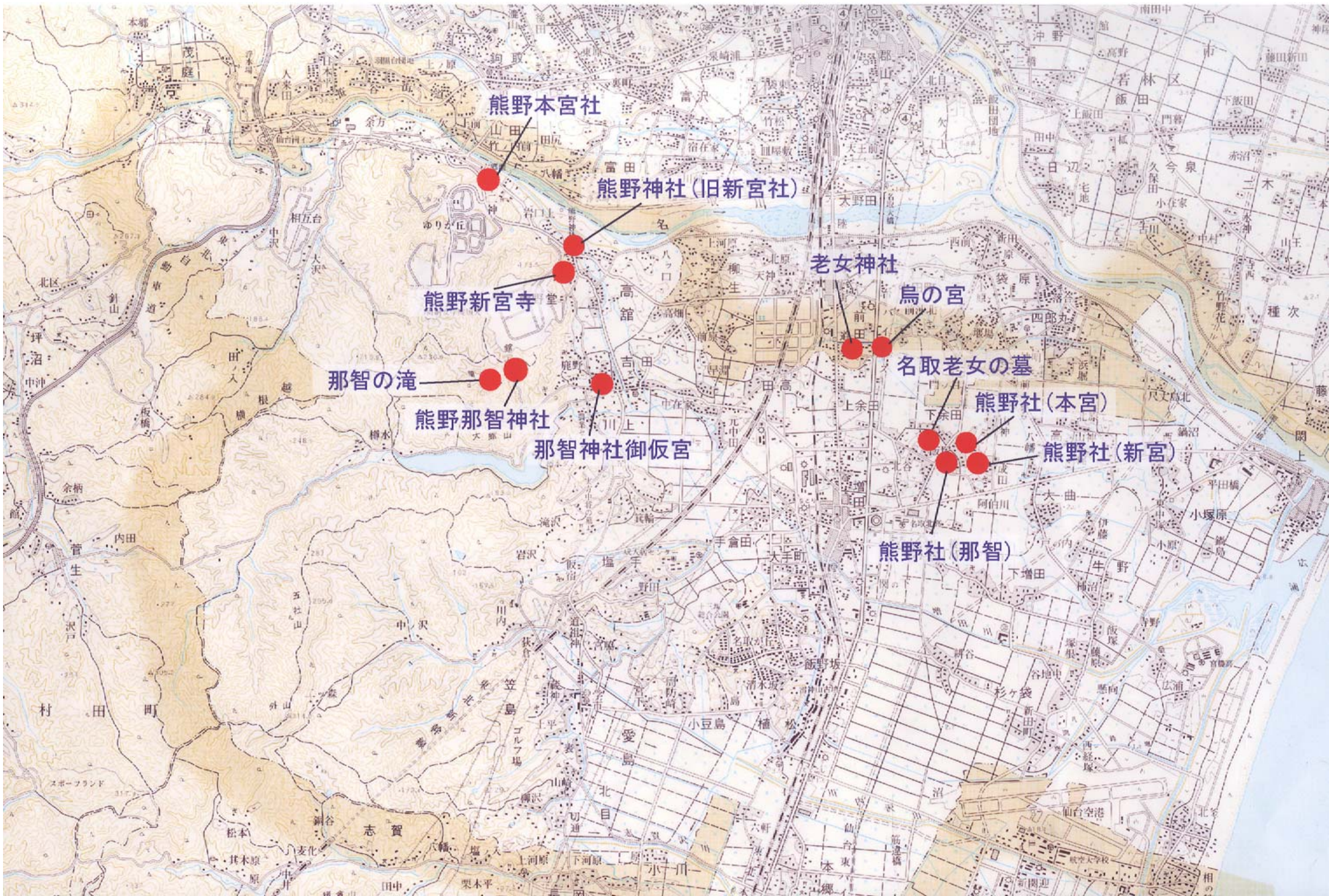
名取熊野三山の勸請

東北地方の名取熊野三社については、仙台湾を熊野灘くまのなだ、名取川を熊野川、高館丘陵を熊野連山に模して、本宮、新宮、那智の三社が他の地域とは異なり別々に勸請かんじょうされています。

名取熊野本宮社は、家津御子神けつみこのかみ、新宮社(現熊野神社)は速玉神はやたまのかみ、那智神社は夫須美神ふすみのかみを主神として社も別々に建てられています。縮小版的ですが、まさに紀州熊野三山の世界を再現するかのような勸請かんじょうのされ方は、名取熊野三社が東北地方の太平洋沿いにおける熊野信仰布教の一大拠点としてふさわしい姿であったと考えられます。

名取熊野神社の縁起えんぎによれば、保安年間(1120～1124)に名取老女なとりろうじょによって勸請かんじょうされたと伝えられていますが、文献記録などから既に平安時代の終わり頃には、熊野三社は存在していたと考えられています。「吾妻鏡」あづまかがみ 文治5年(1189)からは、名取熊野の金剛別当秀綱こんごうべっとうひでつなは、奥州藤原泰衡やすひらの後見人として強大な勢力を誇っていたことが知られ、このことから、名取熊野別当はこの地では軍事的に武士団の棟梁で、宗教的には熊野権現こんげんの名において修験集団しゅげんの管長であったことが分かります。

名取周辺の熊野三社関連の施設



○ 下余田熊野三社、名取老女、 鳥の宮

名取の熊野三社と言えは、^{たかだてくまのどう}高館熊野堂を中心として
^{ちんざ}鎮座している三社が有名ですが、実は増田地区の
^{しもよでん}下余田にも小さいながら熊野三社があることはあまり
知られていません。

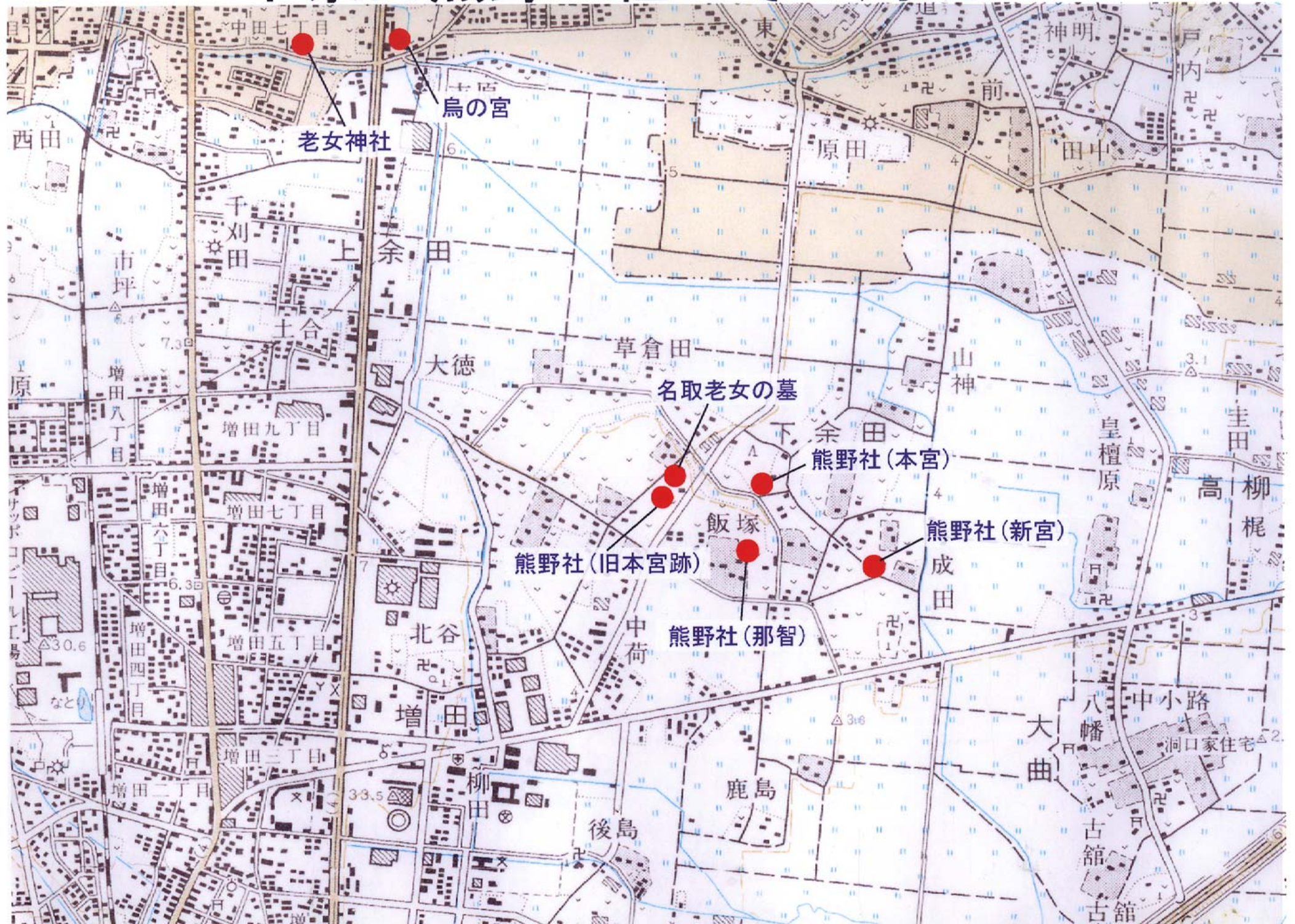
この下余田の熊野三社については、江戸時代の^{あんせい}安政2
年(1855)に書かれた「^{しもよでん ふ ど き ごようかきだし}下余田風土記御用書出」に、紀州
熊野三社の^{ぶんれい}分霊を名取へ^{かんじょう}勧請した^{なとりろうじよ}名取老女と深いつな
がり持つ神社として具体的な内容が書かれています。

三社の近くには、^{なとりろうじよ}名取老女の墓とされる場所もあり、
この地区には古くから、下余田の熊野三社は老女によ
って最初に勧請されたもので、後にこの村から^{たかだて}高館の
三ヶ所に^{ほうせん}奉遷されたという話が伝えられています。

また、ここから北西約1,5km の場所(現在の仙台市太
白区中田の前田地区)には、名取老女が紀州熊野三社か
ら名取の地へ勧請する際、^{しんちょう}先導となった熊野の神鳥
(^{やたがらす}八咫鳥)を埋葬した場所が^{からすのみや}鳥の宮として、また、老女の
屋敷があった場所は^{ろうじよのみや}老女の宮として現在に伝えられて
います。

このように、高館地区以外にも名取熊野三山の成立
に関連する旧跡や伝説がたくさん存在していることは、
この地への熊野信仰普及の様子を知る上で、大変興味
深いものとなっています。

下余田熊野三社とその周辺





くまのしゃ ほんぐう
熊野社(本宮)跡



くまのしゃ しんぐう
熊野社 (新宮)



くまのしゃ なち
熊野社 (**那智**)



なとりろうじよ はか
名取老女の墓



ろうじょじんじゃあと
老女神社跡



からす みやあと
鳥の宮跡

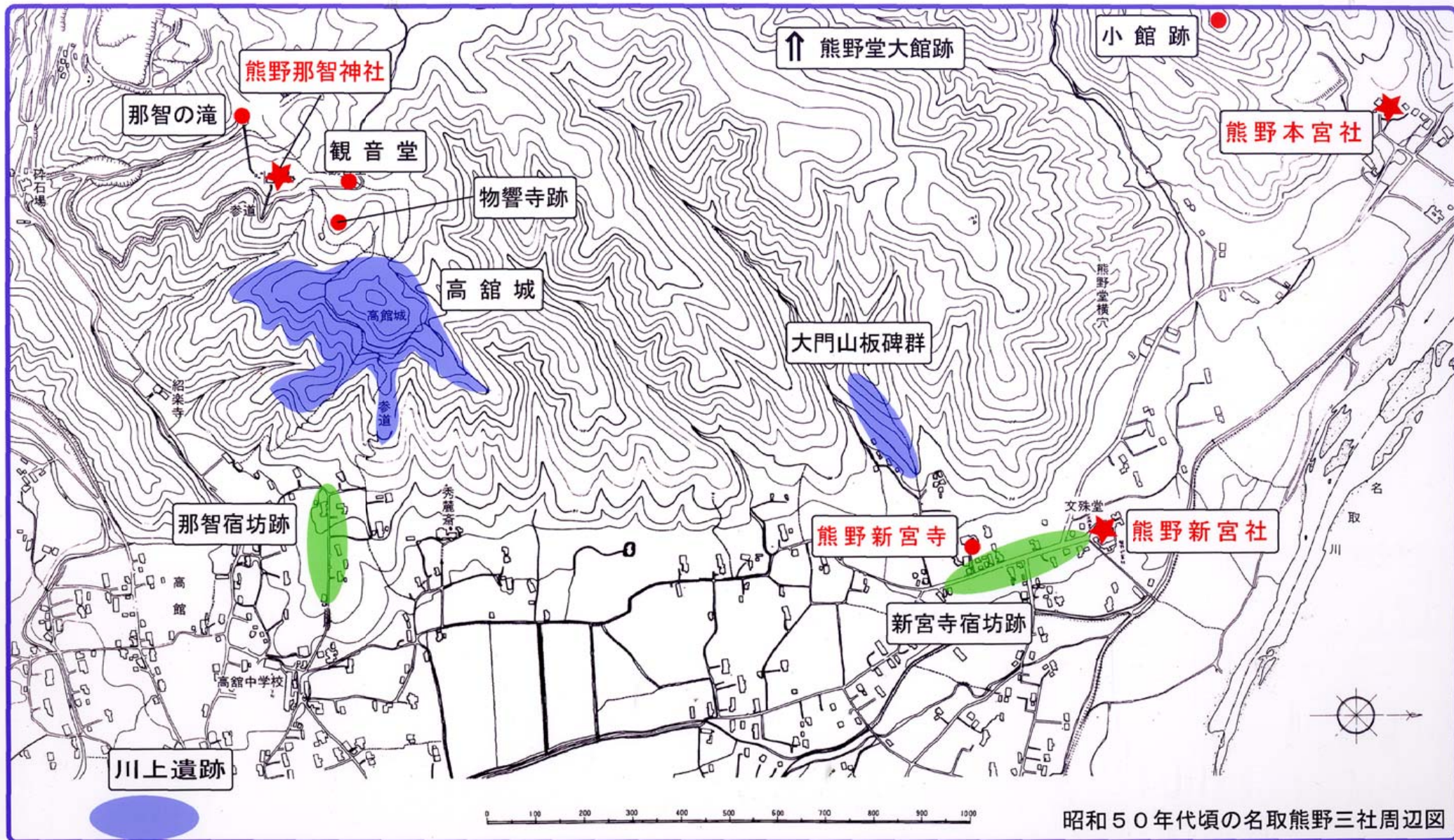


くまのさんざんえんけい
熊野三山遠景(名取平野から望む)

名取熊野三山の絵図(江戸時代頃の様子)



名取熊野三山周辺の施設配置図



昭和50年代頃の名取熊野三社周辺図

くまのさんしゃ

名取の熊野三社

くまのほんぐうしゃ 1. 【熊野本宮社】

本宮社は、本宮十二神とも称されており、社殿が現在の地に移されたのは万治元年(1658)で、以前は現在から南に 500m ほど離れた小館と称する山上に鎮座していたと伝えられています。

主神は家津御子神を祭り、作物の神とされています。社殿については、明治 38 年(1906)宮城県へ提出された「熊野本宮社調査書」によると、元禄元年(1688)改築、長床は延宝4 年(1690)改築となっています。

また、当社所蔵の「名取熊野本宮永留」によれば、永禄6 年(1563)伊達晴宗公より本宮社に神輿、御神馬、御馬具一式が奉納されています。伊達政宗公の仙台開府以降は、元禄3 年(1690)4 月 8 日の御祭礼以後、伊達藩から毎年玄米 3 石 5 斗を拝領することとなりました。

また、当社には下増田の北釜へ神輿を運ぶお浜下りの神事や流鏝馬などが伝わっていましたが、現在は行われていません。

なお、現在、民俗芸能として、古く山伏によって伝えられたという「熊野堂十二神鹿踊」が市指定となり、保存継承されています。



熊野本宮社鳥居から望む小館跡(元宮?)





くまのどうじゅうにじんししおどり
○熊野堂十二神鹿踊

くまのどうじゅうにじんししおどり
熊野堂十二神鹿踊は、熊野本宮社に付属するもので、
ぶんあん 文安年間(1144～1148)に米沢の山伏修験者やまぶししゅげんじゃにより伝え
られたものと言われ、江戸末期に一時中断されましたが、
さいこう 明治になり再興され現在に至っています。

ぎがく 伎楽系の二人立ちの獅子踊りとは異なり、旧仙台藩内
に分布する一人立ちかっこおとど羯鼓踊りの多頭立ての一種で、その
衣装や芸態はその中でも独特なものとされています。

ししおど この特徴ある鹿踊りは、分布する区域としても県内
の南限でもあることから、市の指定文化財となっています。
す。



皇
野
社

くまのじんじゃ きゅうしんぐうしゃ 2. 【熊野神社(旧新宮社)】

元々は新宮社でありましたが、明治以後に現在の熊野神社と称するようになりました。主神は速玉神を祀り、東北地方屈指の熊野神社の一つとされています。

神社所蔵の資料では、文献上、名取熊野新宮の所見は、暦応4年(1341)平泰経の寄進状(市指定文化財:熊野神社文書)ですが、鎌倉時代の「吾妻鏡」には熊野別当等の名前が見られることから、熊野新宮を中心とした修験者集団は名取地方を中心に強大な勢力を持っていたことが伺えます。

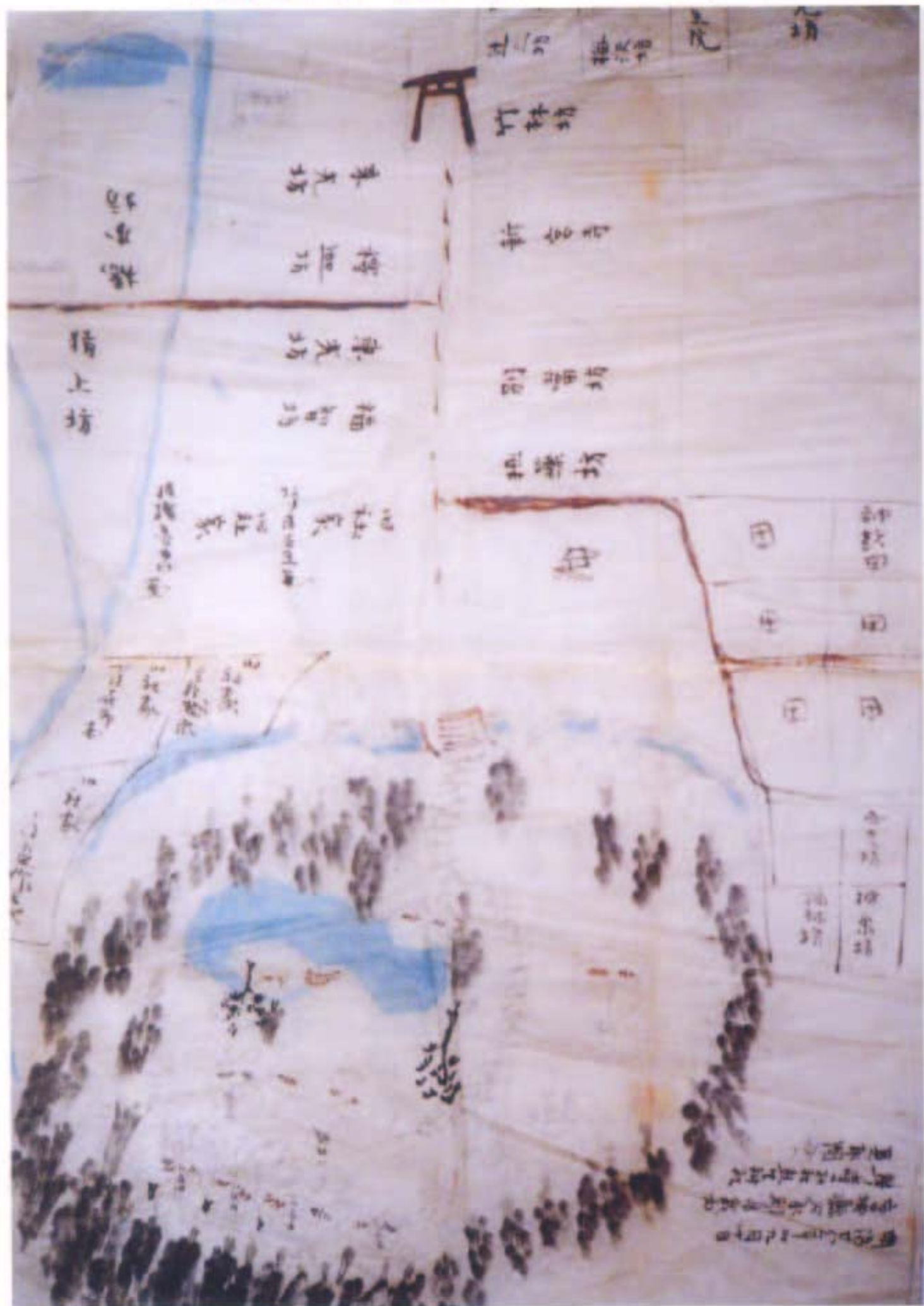
当社が中世以降、武士階級層の土壤に根をおろし広く信仰を集めたことは、所蔵する古文書の数々の寄進状により知ることができます。伊達氏の時代においても、永正11年(1514)植宗が神領の棟役段銭を免除したことを先例として、晴宗、輝宗、正宗による免除が行われ、以後、歴代藩主の種々の寄進、奉納を受け伊達家との深い結びつきを持っていたことが知られています。

社殿については、貞享年間(1684～87)に書かれた古絵図や「安永風土記」、「熊野三山古城書上」などから、長床の奥に玉垣で区画された聖域(奥の院)があり、中央に証誠殿、東側に那智飛龍権現、西側に十二社権現と勧請伝承に関わる名取老女の宮が並列して建っています。老女の宮を除く本殿は、県内唯一の熊野造の様式を持つもので、証誠殿の高欄擬宝珠にある正保2年(1645)の銘や、寛文4年(1664)伊達藩4代藩主綱村造宮の棟札から、江戸時代の初めに改築か新築がなされたことが分かり、近世初頭の熊野造の建築様式を伝える建物として県の指定となっています。

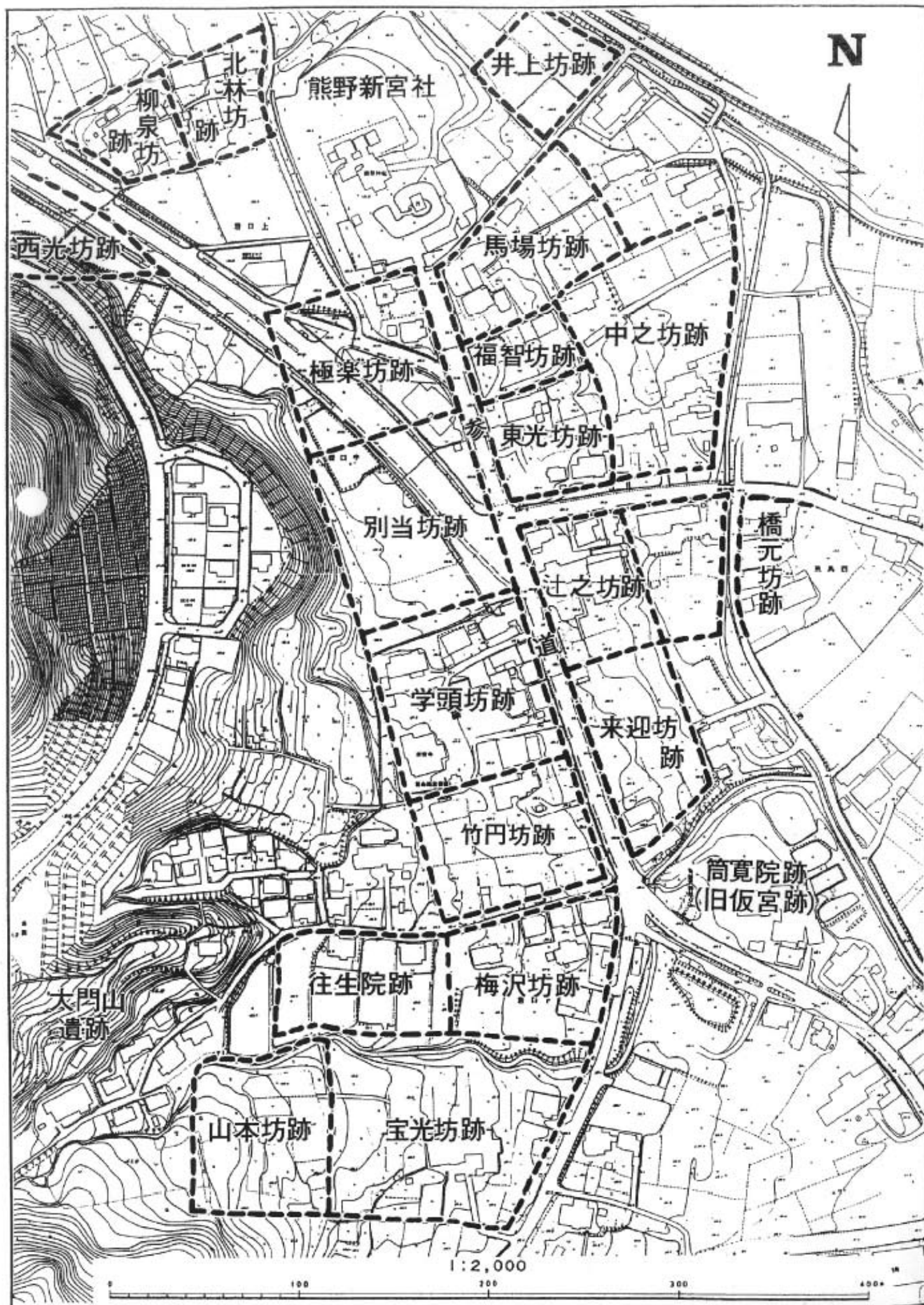
この神社では、明治の初めに神仏合祀が禁止されことから、神社所蔵の本地仏を初め、一切経等の經典、仏具等仏教色のものはすべて文殊堂とともに境内外に移され、新宮寺に帰属することとなりました。

なお、当社には、県指定の民俗文化財となっている「熊野堂神楽」と「熊野堂舞楽」が伝えられています。

熊野神社周辺の絵図



熊野新宮社宿坊跡の配置図







くまのじんじゃもんじょ

○熊野神社文書

熊野神社(旧新宮社)には、中世・近世の古文書が伝わっており、当時の熊野三山へ対する土地寄進とちきしんを行う文書、税金などの免除を約束する文書、神領しんりょうを保証する文書、権力者の命令、神領内しんりょうにおける禁止事項を権力者が設定した文書、そして、名取老女なとりろうじょによる熊野三山勸請かんじょうを伝える縁起類えんぎなどがあり、当時の名取郡や熊野三山のようすを知る貴重な資料として、65 点が市指定となっています。

熊野神社文書

熊野堂緣起

夫當社者靈驗無雙之神明大悲擁護之道場也昔年當所郡有一人平深真信熊野權現而遠詣紀列熊野山于茲有年矣然年光鞋倦不能遂志願人皇七十四代鳥羽院御宇保安四年癸卯相彼于紀川之邑徙遷熊野三山嶺繁隨時權真無止焉又崇徳院御宇保延年中熊野山久住之山伏依有松嶋平泉勝遊之志而既欲赴奥列其旨趣告神祠到證誠殿宿一會夢汝到奥列而問焉有老女者少時多年雖詣當社年老形容枯槁而今止矣於戲旧好不忘即傳斯語付斯物不見其人醒來枕上殘一板標葉其意其音有一首詠歌其歌曰義知登平志登志茂伴豆

隆興四年三月廿三日

為不新大故古詠歌福祈所入

寄附也者早守先例可致決之

狀六件

文和三年正月九日

右京大夫



熊野堂縁起

くまのどうかぐら

○熊野堂神楽

熊野神社(旧新宮社)に伝わる神楽は、^{ぶんじ}文治年間(1185
~1190)に京都の神楽岡^{かぐらおか}から伝わったものされています。

この神楽は出雲の流れをくむ^{いわとかぐら}岩戸神楽で、仙台周辺お
よび県南部に分布する神楽の元祖と言われており、^{ししゅう}詞章
を唱えることのない^{もくげき}黙劇の^{きとう}祈祷の舞で、^{しゅげん}随所に修験の
^{じゅほう}呪法の名残りが見られます。

現在伝わる演目は十二番と番外の十三番があり、神
楽を舞う 7 軒の社家は従来から世襲とされ、今日でも
^{げんかく}厳格に守られています。

この貴重な神楽は、現在、県の指定文化財となってい
ます。

くまのどうぶがく
○熊野堂舞楽

熊野神社(旧新宮社)に舞^ぶ楽^{がく}が伝わった時期は不明ですが、貞^{じょう}観^{がん}2年(860)慈^じ覚^{かく}大^{だい}師^しの山寺立石寺(山形市)の開山に従って来た渡来^{とらい}楽^{がく}人^{じん}の林家の系統を伝えたものと言われています。

現在5曲が伝わっており、神楽と異なり春の例祭時に池の中の特設舞台で舞われるもので、門外不出とされています。

神楽同様7軒の社家により守られ、県内に伝わる数少ない舞楽の一つとして現在、県指定の文化財となっています。

熊野堂神楽



(三剣の舞)

熊野堂舞楽



(太平楽)

かぐらめん

○神楽面 (熊野神社所蔵)

この面は、県指定の熊野堂神楽の演目に合わせて使用されるもので、8面現存しています。いずれの面も木彫りで材質は桐を使用しているものもあり漆と色彩が施されています。面には記名などは残っていませんが、特徴から古いものは室町時代末期頃のものと考えられています。

神楽と共に伝えられた貴重な道具として、5面が市の登録文化財となっています。

ぶがくめん

○舞楽面 (熊野神社所蔵)

この面は、県指定の熊野堂舞楽の5つの演目に合わせて使用されるもので、5面現存しています。神楽面同様の木彫りで漆と色彩が施されています。

これも舞楽と一体として伝わる貴重な道具として、3面が市の登録文化財となっています。



注連切之舞(手方雄命)



国鎮之舞(経津主命)



獅子之舞(大山祇命)



魚釣之舞(蛭子)

神楽面



龍王の面



咲面(老爺)

腫面(老婆)

舞楽面

もくぞうこまいぬ

○木造狛犬(熊野神社所蔵)

狛犬は、平安時代頃に中国を経て高麗(こま)から伝わったもので、神仏の魔よけと聖域を守るものとして一般に親しまれてきました。

当神社に伝わる狛犬は阿形と吽形が対になり、どちらも漆塗りの痕跡が残るカツラ材を用いた木製のものです。阿形は雄で角と渦を巻くたてがみがあり、吽形は雌で角は無く、たてがみも垂れて肩から背中にかかっています。製作技法から江戸時代より前に製作されたと推定されています。

現在は、江戸時代以前の数少ない狛犬の一つとして貴重であることから、市の登録文化財となっています。

熊野神社木製狛犬



熊野神社宮太鼓 (いびつ太鼓)



みやだいこ

○宮太鼓(熊野神社所蔵)

神楽や舞楽の伴奏として使用されるもので、革張両面の幅が異なる珍しい形で、「いびつ太鼓」と言われています。

用材は桐材を用い、太鼓の内部には過去の修理の年代や修理者が書かれ 19 回修理されたことが分かっています。確認された年号から、作られたのは江戸時代の寛永^{かんえい}年間(1624～1644)以前であると推定されています。

この太鼓も古くから神楽や舞楽の伴奏道具として伝わる貴重な文化財として、市の登録となっています。

いかり

○ 錨 (熊野神社所蔵)

閑上浜で江戸時代頃までは、大漁を祈願し錨いかりを供養する行事があり、後に錨祭りの大祭となったと言われてい
ます。

明治以降、その錨いかりの一つは熊野堂の熊野神社へ、もう一つは愛島小豆島の清水峰神社へ奉納されましたが、
後者は現存していません。

この錨いかりは、今は無くなってしまった伝統行事の主役を担った貴重な道具として、市の登録文化財となっています。



錨祭りのようす



関上浜錨祭絵図(関上風土記より)

くまのなちじんじゃ

3. 【熊野那智神社】

なちじんじゃ たかだてやま ちんざ
那智神社は、高館山の山頂に鎮座し、眼下に名取平野と太平洋を望み、この神

社の由来や伝説と関係の深い閑上浜を眺めることができます。また、神社の背後

の沢には小さいながら滝があり、^{きしゅう くまのなちたいしゃ}紀州の熊野那智大社の施設配置を模したことが伺えます。

この神社の由来伝説では、^{ようろう}養老3年(719)広浦(今の閑上)の漁師^{じへい}治兵衛が漁で引き上げた^{ごしんたい}御神体を家に安置していたが、ある夜、御神体が光を放ち、その光の指す方向が高館山であったことから、そこに宮社を建て^{はぐろごんげん まつ}羽黒権現として祀ったと言われ、その後、^{ほうあん}保安4年(1223)に名取老女が紀州の熊野那智大社の^{ぶんれい ごうし}分霊を合祀して^{なちじんじゃ}那智神社と改称したとされています。

^{くまのふすみのかみ}主神は熊野夫須美神を祀り、旧暦6月10日が恒例祭で、昔は閑上浜まで浜下りの神事が行われ、正月には「カラスゴ(^{ごおうほういん うじこ}牛王宝印)」を氏子に配布していました。

近世は、伊達家の厚い^{すうけい}崇敬を受けており、明治になるまでは別当寺である^{べつとうじ ぶつきょうじ}物響寺の支配下にありました。

明治元年の^{だじょうかんぷ しんぶつぶんり}太政官布による神仏分離の際、社殿に奉納された^{みしょうたい かけぼとけ}御正体である懸仏等は関係者により密かに埋めて隠されました。こうして難を逃れた^{かけぼとけ どうきょう}懸仏・銅鏡類は、明治31年(1898)の拝殿移築の時に床下から再発見され、現在では国と県の指定文化財となっています。











くまのなちじんじゃかけぼとけ どうきょう
○熊野那智神社懸仏・銅鏡

明治 31 年(1898)那智神社再建の折に、社殿^{しゃでん}の床下から多数の懸^{かけ}仏^{ぼとけ}と銅鏡^{どうきょう}が見つかりました。懸^{かけ}仏とは、元々神社に祀^{まつ}られていた鏡に仏の姿を表現して信仰の対象としたもので、柱や軒などに吊るし懸^かけて用いたため、そう呼ばれています。

これらは、当時の人々が日々の平穩や極樂往生^{ごくらくおうじょう}を願^{ぼうのう}い奉納したもので、多くは鎌倉時代以降ものです。

当神社が所蔵する 155 点の懸^{かけ}仏と銅鏡は、信仰の歴史を今に伝える貴重な文化財として、41 点が国指定、114 点が県指定となっています。

那智神社懸仏・銅鏡



銅鏡



懸仏

くまのしんぐうじ

4. 【熊野新宮寺】

現在は真言宗の熊野山新宮寺と称し、本山は京都醍醐山報恩院だいごさんほうおんいんで、本尊は不動尊ふどうそんとなっている。

名取熊野三社かみじょうが勧請かんじょうされたとされる平安時代末期以来、熊野新宮社と一体となり「熊野新宮」を形成していたが、明治の神仏分離令しんぶつぶんりれいにより新宮社と分離することとなった。

「封内風土記」によると、新宮寺の学頭坊がくとうぼう、別当坊べつとうぼうが熊野神社の一切の社務も司っていたことが知られ、文献上の初見は、熊野神社文書にある天正3年(1575)に伊達輝宗が新宮寺に対し熊野堂神領むなやくたんせんの棟役段銭を免除した免除状となります。

新宮寺周辺では中世には、学当坊・別当坊の他、馬場坊・極楽坊・辻之坊など16坊があり、近世の「封内風土記」では井上坊を加えた17坊の存在が知られることから、当時、多くの衆徒を抱え、広大な神領を管理し繁栄したようすが伺えますが、安政年間(1854~59)には半数の坊が廃寺となっていたようです。

明治初年以降、新宮社に伝わる一切経いっさいきょうと蔵する文殊堂もんじゅどうを管理するようになりましたが、現在その一切経いっさいきょうは国指定の文化財となり、また、文殊堂もんじゅどうの本尊ほんぞんである文殊菩薩像もんじゅぼさつぞう他4体の仏像は市の文化財に指定されています。また、一切経いっさいきょうが収蔵された櫃ひつや笥はこと写経に使った机は、市の登録文化財となっています。



真言宗
智山派
新宮寺
住持



お酒い
禁止
新宮寺



○一切経いっさいきょう (熊野新宮寺所蔵)

一切経いっさいきょうは仏教せいてん聖典を総称したもので、別名大蔵経たいぞうきょうとも呼ばれています。

新宮寺の文殊堂もんじゅどうには、写経された一切経いっさいきょうが3,000巻あまりが伝わっており、これほど多く遺のこされているのは、岩手県平泉の中尊寺ちゅうそんじを除くと、東日本では他に例がありません。

その中には、平安時代の終わり頃と、鎌倉時代の初めはじめ頃に集中して書写されたものがあり、大半は後者の時期のものです。その後、南北朝の時期に大般若経だいほんにやきょうが写されています。

一切経いっさいきょうの中には、山形県の慈恩寺じおんじや立石寺りっしやくじや仙台市の国分寺こくぶんじなどから移入されたり、経巻を転写してテキストとして写経したことが分かるものもあり、一切経事業いっさいきょうに由緒のある寺々が参加していたことが伺えます。

このように新宮寺文殊堂一切経もんじゅどういっさいきょうは、貴重な文化財として、2,568巻が国、411巻が市の指定となっています。

新宮寺一切經

名馬大六多囉入三分二大乘是大乘以
 小乘二百五十或如是語等名高僧之謂此
 注石以上作罪佛法或是在行是不應
 行作是幸得是罪略說有八十部二有二
 分一者存偷僧國祇在餘部本生阿波池那
 阻取要用作十部有八十部其真沙律是故知
 律訶嚴若波囉來律等依多律律中以住不
 事以吳改列既是在律三藏中律分九
 定律律者婆法即以其律略三年歲在辛
 日十二月廿日至帝安四季夏於道遠園
 中西門閣上為排天王出此律論七事十
 二月廿七日乃說其中兼出注本律法成
 秋津一百論律法要解向五十萬言并此
 律論一百五十萬言論均而女四卷一辨律
 一品是余論其本二品已下法師略之
 取其足以開釋大意而已不復論其貴
 律得此百太若書出之時十倍於此

大智度律論卷第一百

養和二年六月廿三日 吉馬了

此律論意是宗律教所不

此律論相結句可結下世菩薩以結 雖有莊嚴者
 余持世尊後說偈言
 別說此是我心隨於智慧身精勤學字 不亦除結嚴
 持世尊後說偈言
 及說此相結句可結下世菩薩而結 此律論所結者
 余持世尊後說偈言
 眼可與吾身及是持世法名若都死餘心定盡滅度
 奇法如走者所除於結嚴 雖得與松毛六年律集慶
 大教以唯林聚為二所隨一結嚴為十

別說此是我心隨卷第十五

名取勝野靈以三處寺有一字
 此是也 如法華經

此律論意是宗律教所不

養和二年六月廿三日 吉馬了

○^{きょう びつ}経櫃、^{きょう ばこ}経篋、^{きょう づくえ}経机(熊野新宮寺所蔵)

^{きょう びつ}経櫃、^{きょう ばこ}経篋、^{きょうづくえ}経机は、新宮寺文殊堂に伝わったもので、新宮寺一切経が10巻単位で^{きょう ばこ}経篋に入れられ^{きょう びつ}経櫃に収納されていました。

^{きょう びつ}経櫃はケヤキ材の6脚付く^{から びつ}唐櫃で、内外面には赤と黒の漆塗りが施され、^{ぼくしよめい}墨書名から江戸時代の初頃に作られたことが分かっています。

^{きょう ばこ}経篋は67個現存し、外面のみ赤漆で仕上げられています。仕上げの方法などから^{きょう びつ}経櫃と同じ頃に作られたと思われるされています。

^{きょうづくえ}経机は3台現存し、机は写経や経を読んだりする時に使用したものと伝えられています。白木の木製机で、^{ぼく}墨書名から江戸時代の中頃に奉納されたことが分かっています。

これらは、一切経や^{もんじゅぼさつぞう}文殊菩薩像などと共に熊野新宮寺の^{もんじゅどう}文殊堂に伝わる貴重な文化財として、市の登録となっています。

經櫃と經篋



經机



經典(一切經)



もんじゅぼさつぞう
○文殊菩薩像

熊野新宮寺文殊堂もんじゅどうには一切経いっさいきょうと共に、本尊である「文殊菩薩」とそれにつき従う「善財童子ぜんざいどうし」・「仏陀波利三蔵ぶつたはりさんぞう」・「最勝老人さいしょうろうじん」・「優填王うてんおう」の像が伝わっています。

獅子の上に乗る文殊菩薩像もんじゅぼさつぞうは、奈良時代に活躍した僧行基ぎょうぎの作と伝えられてきたものですが、詳細な調査の結果、平安時代中期以降の彫刻形式である「寄木造りよせぎづく」であることから、平安時代末頃の仏像の特徴を備えており、また、慈恩寺じおんじ(山形県寒河江市)に伝わる仏像とも類似することが分かりました。

現在この貴重な5体の像は、市指定の文化財となっています。

文殊菩薩像



ご おう ほう いん

○名取熊野三山の牛王宝印

くまの ごおう

熊野牛王は、俗に「オカラスさん」ともよばれ、カラ

ス文字で書かれた熊野山独特の御神符ごしんぶです。

この起源は明らかではありませんが、熊野の主祭神しゅさいしん、

けつみこのかみ あまてらすおおみかみ たかまがはら
家美御子神と天照皇大神との高天原においての誓約、あ

るいは、じんてんのうとうせい
神武天皇東征の際の熊野烏(ヤタガラス)の故事
に由縁するとも言われています。

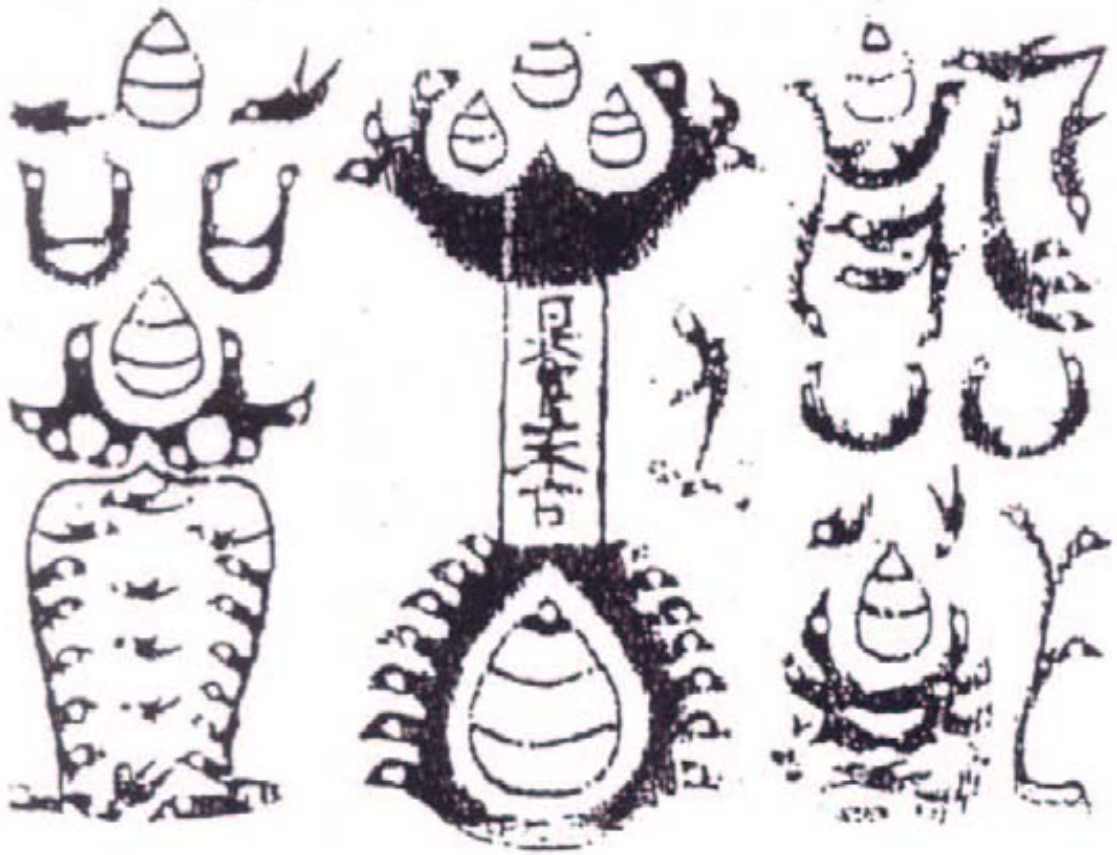
ごしんぶ

御神符は、一般的に熊野信仰の人々を災厄さいやくから守る役

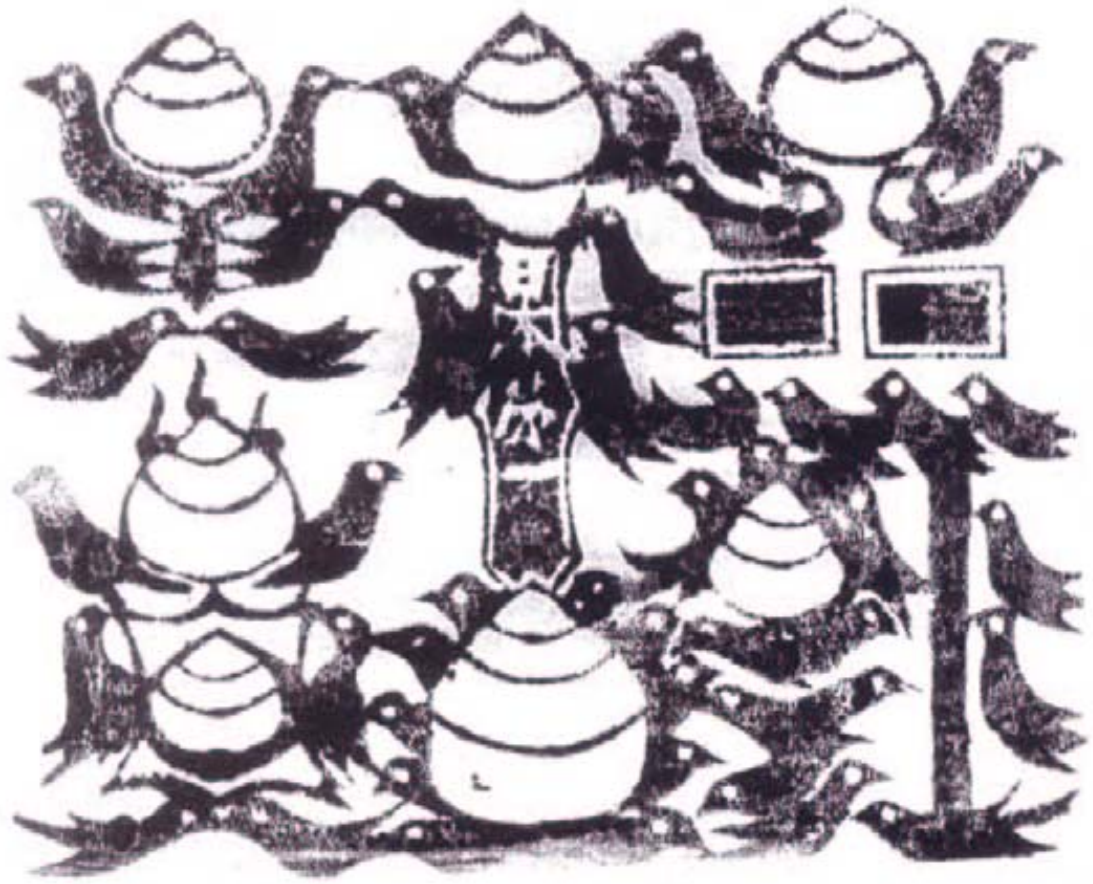
割のものです。中世には「誓約書せいやくしょ」、近世には「起誓文きしょうもん」

の代わりとして使われることもありました。

熊野本宮社



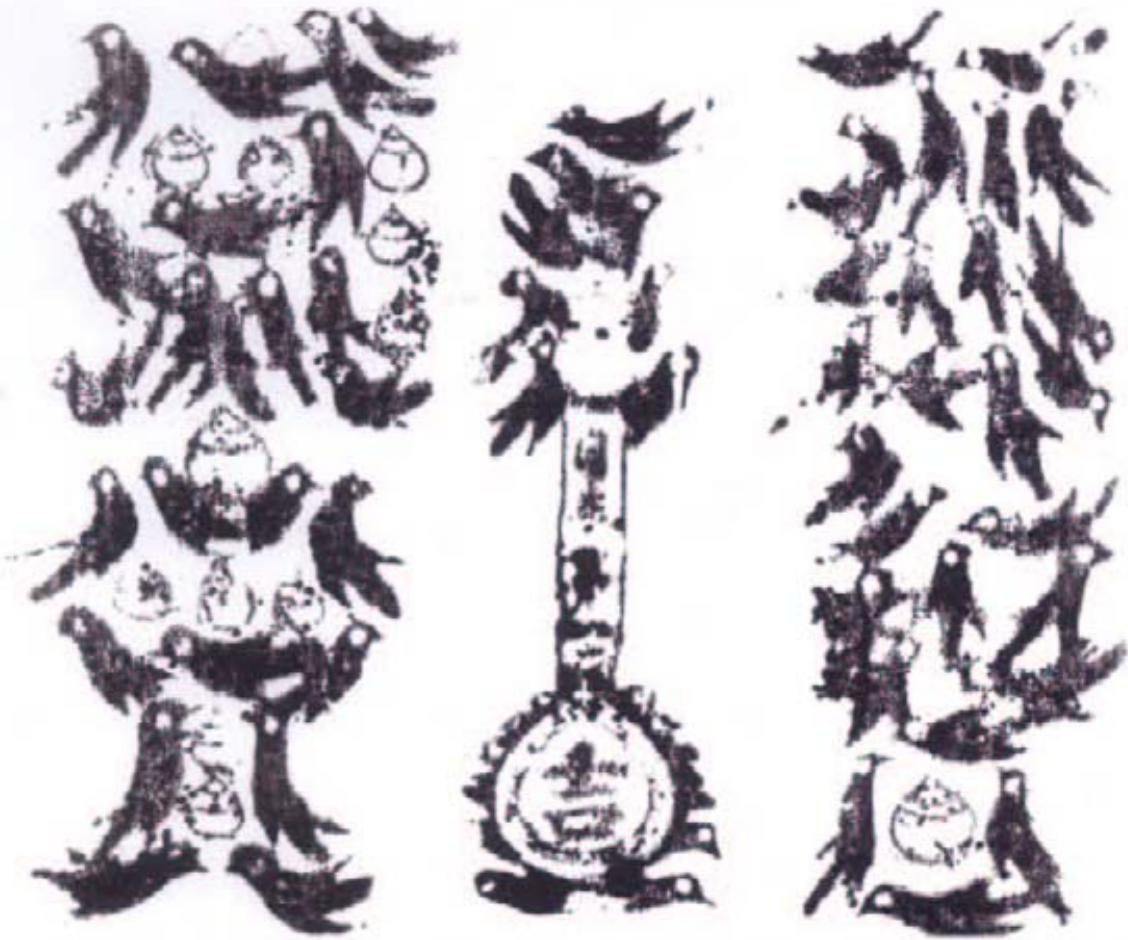
熊野神社(旧新宮社)



熊野神社の御祭神
新宮社
新宮社
新宮社



熊野那智神社



くまのさんざん
熊野三山周辺の

関連施設

1. 【大門山遺跡】

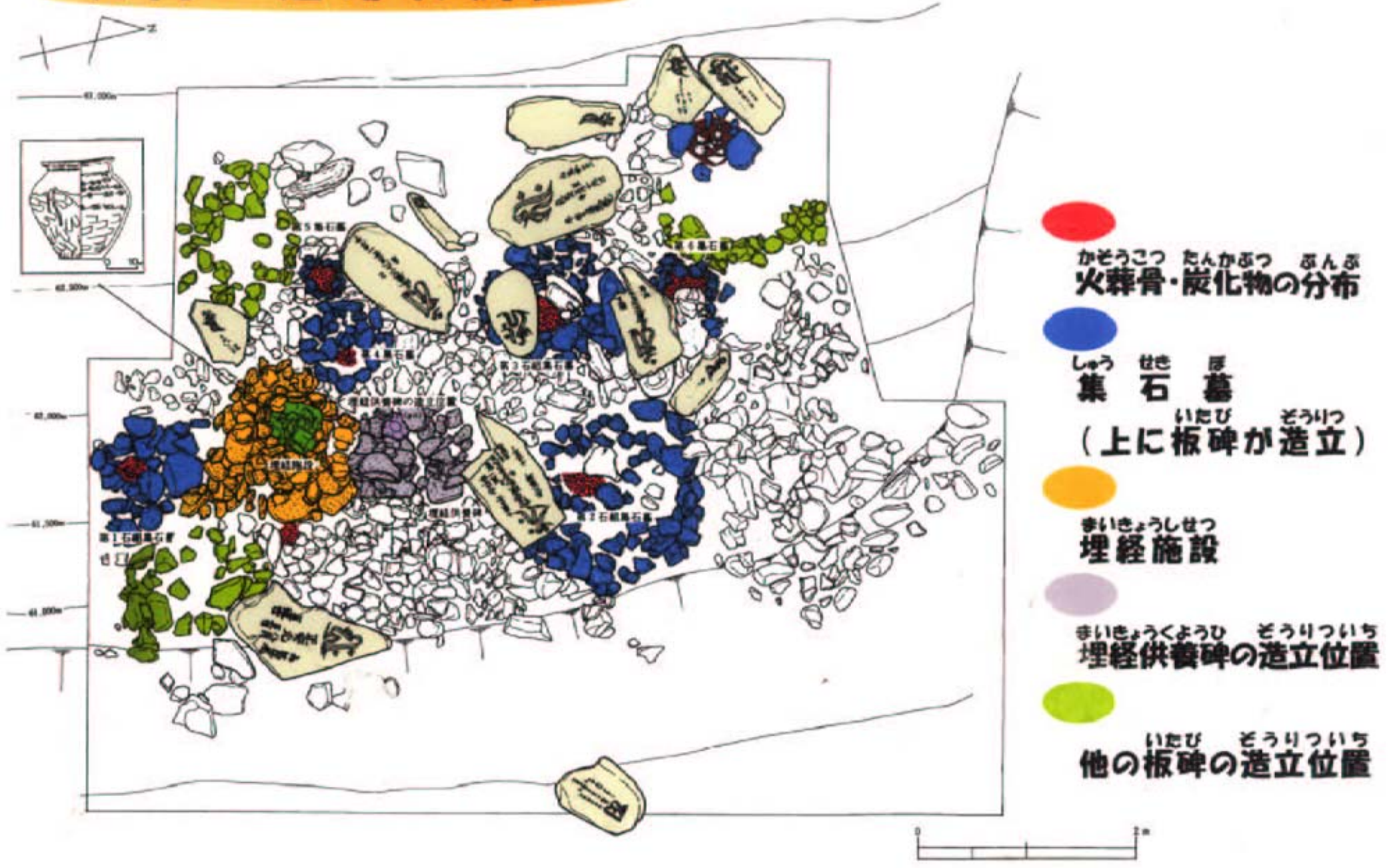
遺跡は、熊野新宮寺の南西側に位置し、寺ノ沢と院ノ沢と呼ばれる沢に挟まれた南斜面沿いに立地しています。この場所は名取熊野三社勸請かんじょうの地域にあることから、その関連施設の一つと見られています。

発掘調査の結果、250基あまりの板碑いたびの他、埋経施設まいきょうと火葬骨しゅうせきぼを納めた集石墓群が発見され、遺構の位置や性格などから、熊野信仰布教にかかわった人々の墓所ぼしよとともに、熊野三山を信仰した人々の供養所くようじよであったと考えられています。

また、名取は県内でも板碑いたびが数多く分布するところで、市内ではこの大門山付近にその大半が集中しており、詳細な調査をすれば、少なくとも300以上存在するものと思われます。

このように、大門山遺跡は墓所・供養所ぼしよ・くようじよとしては県内最大規模で、中世における墓制・葬制を研究する上で貴重な遺跡とされ、平成2年に市指定となっています。

だいもんやまいせきじつとくす 大門山遺跡実測図



大門山遺跡調査状況



大門山遺跡(寺山地区)の板碑



梵

弘安九年

丙戌

十一月廿五日

敬白

※弘安九年は、一二八六年

梵字は、キリーク（阿弥陀如来）を表す。

刊

右志者為道一

延慶二年
西己酉八月十一

敬 日 白

往生極樂故也

※延慶二年は、一三三九年

梵字は、ア（大日如来）を表す。

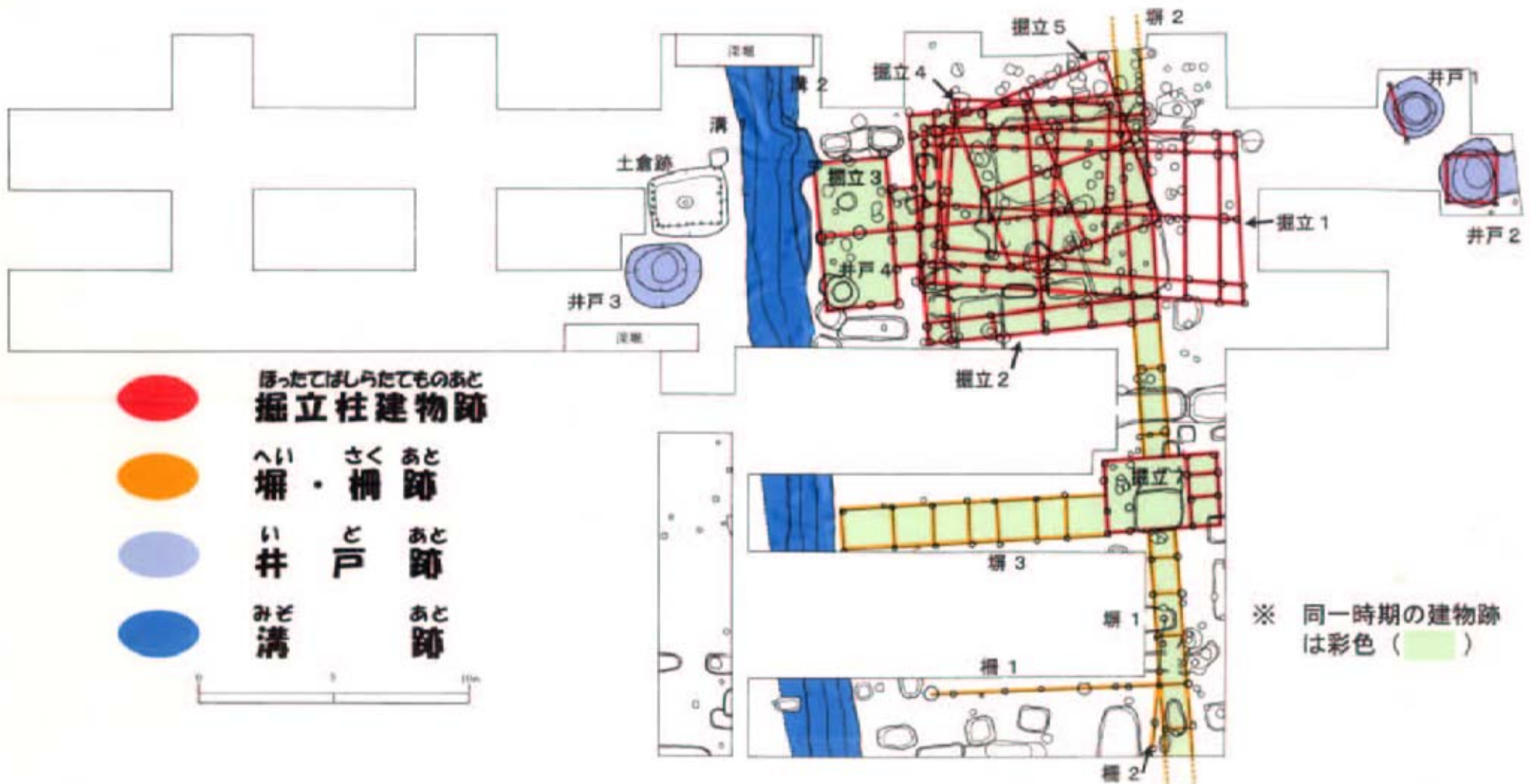
2. 【川上遺跡】

川上遺跡は、熊野那智神社を望む上り口の、一の鳥居のある遥拝所(お仮の宮)の南側約 200m に位置し、遺跡付近は旧東街道沿いの那智神社の門前宿と推定されている場所にあたります。

以前の発掘調査の結果、中世の時期を中心とした遺構・遺物が数多く発見され、特に溝や塀で区画された建物跡は、規模や配置の状況から社寺的性格を持った施設と考えられています。出土遺物についても陶磁器が多く、常滑産や渥美産の他地元産の陶器(甕・壺・播鉢)や中国産の青磁など多く出土しています。

調査の状況から、主な中世の施設は、13 世紀後半～15 世紀(鎌倉時代後半～室町時代)のものと考えられ、遺跡の性格は、周辺の歴史的環境から熊野那智神社に
関係する宿坊跡しゅくぼうあととされています。

かわかみ いせき いこうはいちず
川上遺跡遺構配置図



川上遺跡の発掘調査



発見された建物跡



調査区从那智神社を望む

川上遺跡出土輸入陶磁器(青磁)



たかだてじょうあと

3. 【高館城跡】

高館城は、高館山（標高203m）の中腹から山頂付近にかけて築城された円郭式^{えんかくしき}の山城^{やまじろ}で仙台平野から仙台湾を一望に見渡せる場所に位置しています。

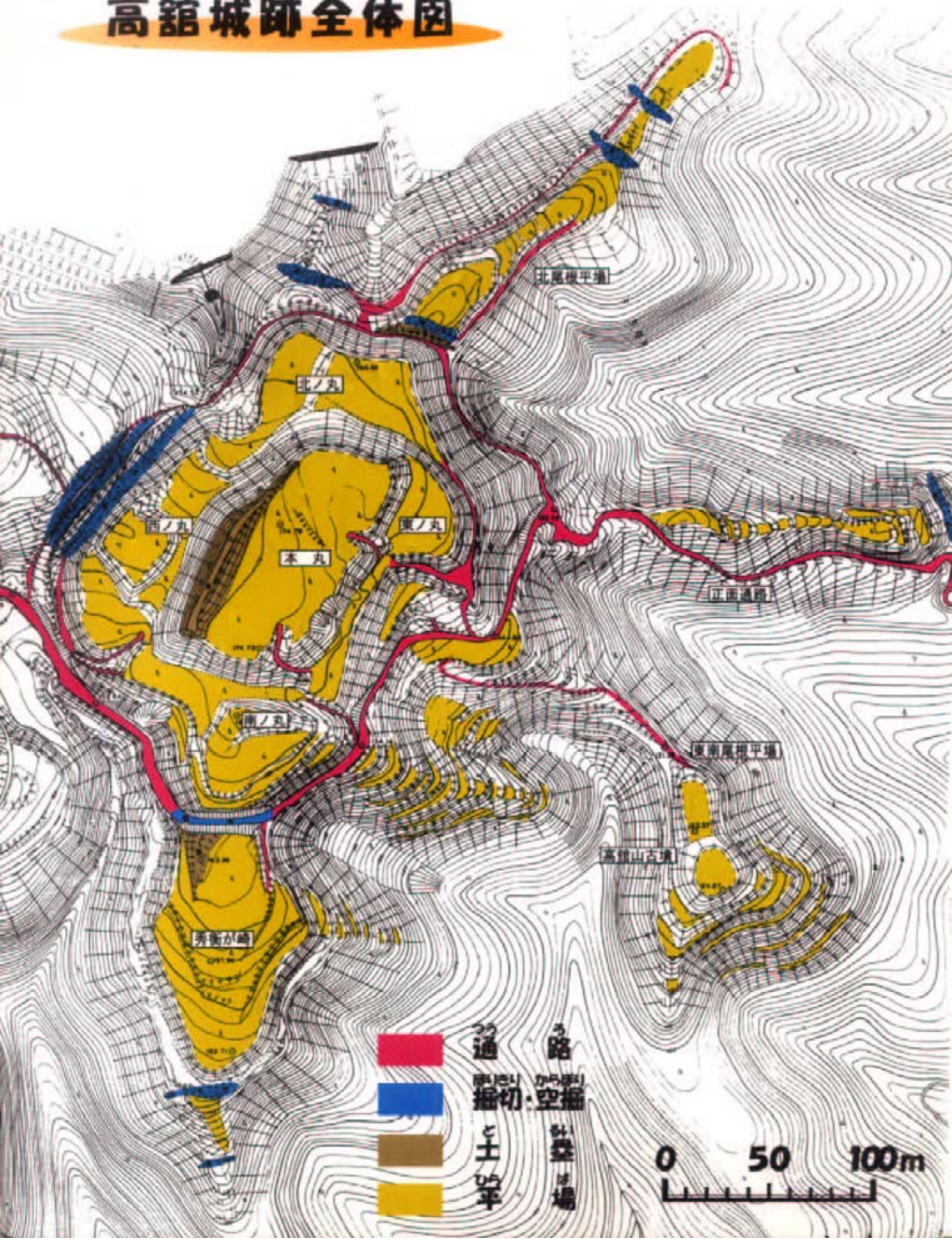
城の規模は、東西400m、南北500mに亘って土塁^{どるい}や平場の施設が認められ、中央本丸の周りには、北ノ丸・東ノ丸・南ノ丸・西ノ丸があり、北から南にかけての3ヶ所の尾根には小規模の平場があり、一つは秀衡^{ひでひら}が館を築き、文治5年(1189年)奥州合戦^{おうしゅうかっせん}の折は藤原勢が同城に立て籠もり、鎌倉勢を迎え撃ったと言われています。

その後、永禄年間(1558～1570)に伊達植宗^{たねむね}が一時居城し、その後、家臣の福田駿河守^{ふくだするがのかみ}を城主として置いたとされています。

また、観応^{かんのう}の擾乱^{じょうらん}(1351)で多賀城をめぐる攻防の中に出てくる「羽黒城」^{はぐろ}・「名取要害」^{なとりようがい}は高館城のことだと言われています。

このような歴史的背景を持つ高館城は、市内に現存する中世の城館跡の中でも典型的な山城として大変重要なものであることから、平成2年に市の指定文化財となっています。

たかだてじょうぜんたいず
高館城跡全体図



くまのどうおおだてあと

4. 【熊野堂大館跡】

くまのどうおおだてあと

熊野堂大館跡は、本宮社から南に約 800m、標高 210m 前後の丘陵の突端に位置し、三方が深い谷に囲まれている立地条件から、まさに天然の要害ようがいといえます。

この館跡は、『仙台領古城書上』に「黒崎城」、『安永風土記』に「黒崎館」の記載があり、それに該当するものと思われ、規模は東西 150m、南北 600m の南郭、中郭、北郭の三郭があり、いずれも円郭式えんかくしきの造りとなっています。

発掘調査の結果、南郭では土塁と空堀に囲まれた各平場から、32 棟の掘建柱ほったてばしら建物跡たてものあとの他、門跡さくれつ、柵列ゆうすい、湧水施設などが発見され、北郭からは三段の平場くるわと曲輪ほったてばしらたてものあとから、規模は小さいが 54 棟もの掘建柱建物跡が発見されています。

遺物は、中世陶磁器類ちゅうせいとうじきや、かわらけなどの土器類、斧やじりや鎌などの鉄製品すずり、硯いしうすや石臼などの石製品、中国産の古銭類などが多く出土しています。

このような調査の状況から、館跡の存続年代は鎌倉～室町時代(14 世紀～15 世紀後半)頃と見られ、施設の性格は、熊野三社(本宮、新宮、那智)とその施設が立地する熊野三山(高館山、大門山、五反田山)に囲まれた位置にあることなどから、熊野信仰布教に関わった修験集団しゅげんの政治・軍事・宗教面での拠点施設であったと考えられています。

熊野堂大館跡(南郭)



調査地区全体の状況



南郭の中心平場の状況

熊野堂大館跡(北郭)



調査地区の遠景



中心施設建物跡の検出状況

熊野堂大館跡(北郭)鳥瞰図



熊野堂大館跡出土中世陶器





カーナくん&ヤタガラスくんとまなぶ

くまのしんこう

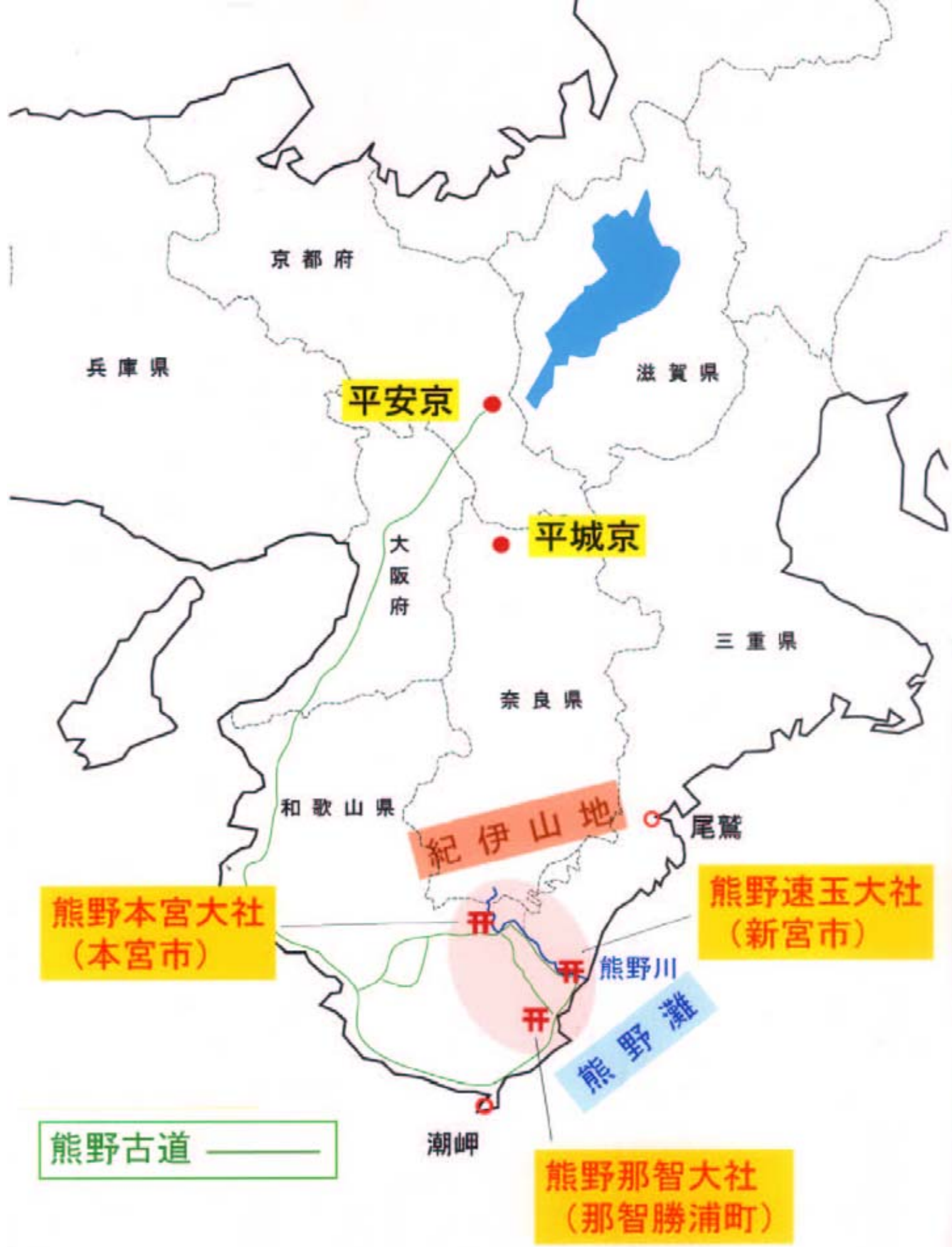
熊野信仰ってなあに？



1. 【熊野地方はどこにある？】

くまのしんこう 熊野信仰の中心地は、和歌山県ほんぐう本宮市、しんぐう新宮市、なちかつうら那智勝浦町です。この熊野地方は和歌山県と三重県との県境付近に位置しています。

また、1年を通して比較的温かく、雨の多い気候となっています。紀伊山地のけわ険しい山々や熊野川、なち たき那智の滝をはじめとする大小数多くの滝、荒波がたつくまのなだ熊野灘などの豊かな自然にも囲まれています。



【熊野地方の位置】

熊野は古代の都、^{へいじょうきょう}平城京

^{へいあんきょう}や平安京の南にあるんだ。



台風の通り道で有名な^{しおの}潮

^{みさき}岬や、雨の量がとっても多

^{おわせ}い尾鷲市の近くだね！



熊野本宮大社

大斎原

开

开

熊野速玉大社

开

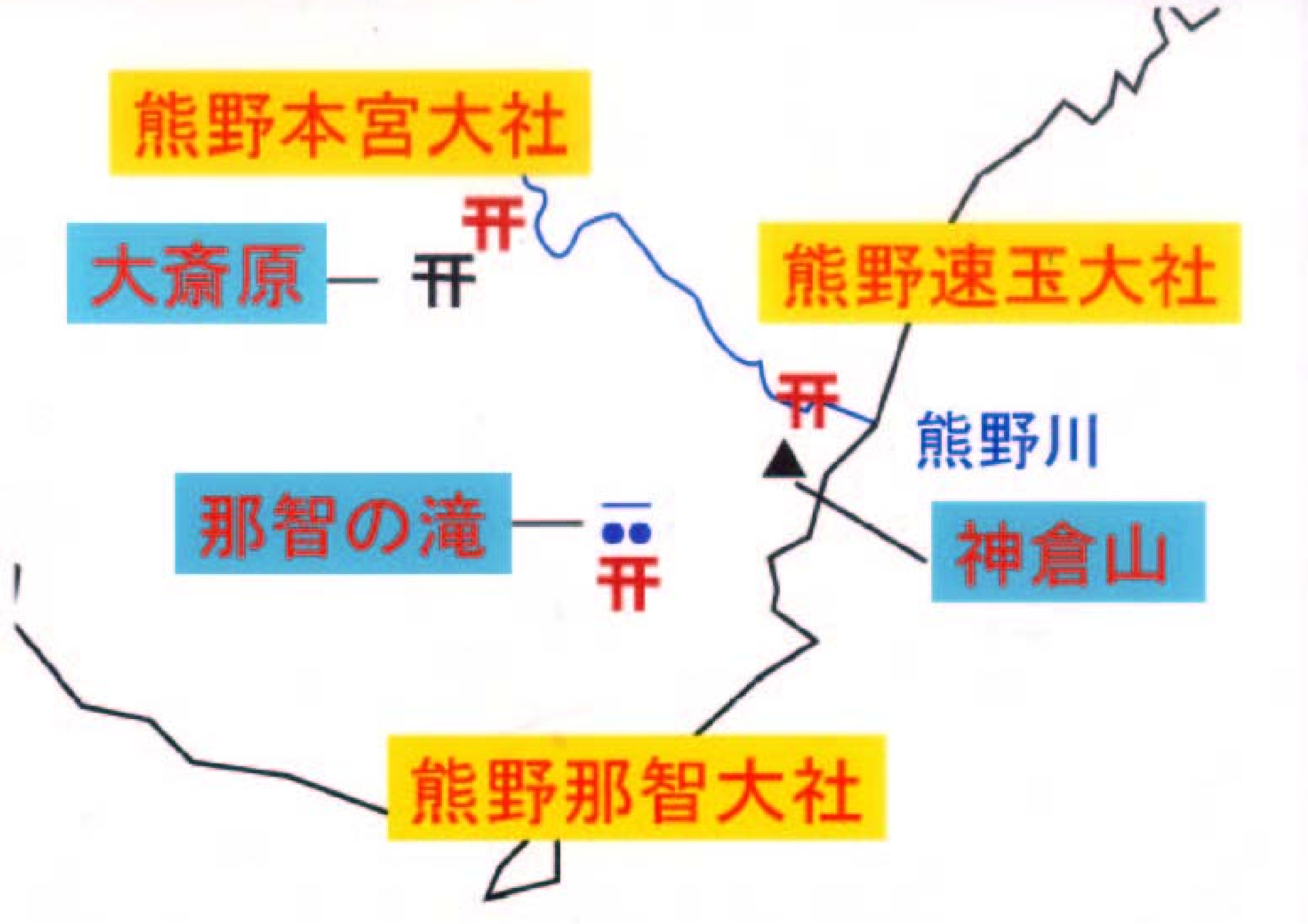
熊野川

那智の滝

二
开

神倉山

熊野那智大社



くまのしんこう

2. 【熊野信仰のはじまり】

日本では古代から山・樹木・岩石などの自然や鳥・獣^{けもの}などの中で、特に神秘的^{しんぴてき}なものを神としてあがめてきました。熊野地方には、変わった形の岩がならぶ海岸線や、「ゴトビキ岩」と呼ばれる巨岩、130mの高さを誇る日本一の「那智の滝」^{ほこ}^{なち}などすばらしい景色に恵まれています。美しい熊野の自然に人々は感謝し、また、おそろしさ、不可思議^{ふかしぎ}さを感じてきたにちがいありません。そのため、古くから死者の霊が集まる所、黄泉^{よみ}の国への出入口として考えられてきました。このような自然への信仰が熊野信仰^{くまのしんこう}のはじまりといわれています。

また、奈良時代（8世紀）に大和朝廷^{やまとちやうてい}によってつくられた『古事記』^{こじき}『日本書紀』^{にほんしよき}（日本の国づくりや神話をまとめた書物）には、「八咫鳥」^{やたがらす}や「円座石」^{わろうだいし}、「天磐盾」^{あまのいわだて}など熊野地方に関するものも数多く残されています。



^{せいぎ}
「世紀」は、100年単位での
時代の数え方だよ。例えば
8世紀は701～800年、11世
紀は1001～1100年になる
んだ。



小学館 日本歴史館 大分県 宇佐市

【ゴトビキ岩】



な ち たき
【那智の滝】



集英社 週刊古社名科巡拝の旅より転載

おおゆのはら きゅうほんぐうしゃ
【大齋原 (旧本宮社)】



おおゆのはら くまのほんぐうたいしゃ
大斎原は、熊野本宮大社が

元あった場所だよ。この鳥^{とり}

^い居は高さ 34m・幅 42mもあ

って、日本一の大きさだよ。

わろうだいし
円座石

熊野古道（熊野三社をお参りする道）の途中にある梵字が彫られた大石です。この上で熊野の神々が談笑したと言われていいます。石の梵字は、それぞれ阿弥陀如来・薬師如来・観音菩薩を表しています。



集英社 週刊古社名刺地神の探々 より転載、加工

あまのいわだて
天磐盾

神武天皇（『日本書紀』や『古事記』において初代の天皇とされている）が熊野に上陸し、最初にお祈りをささげた場所です。新宮市神倉山のゴトビキ岩が天磐盾の上部であるといわれています。



やたがらす
八咫鳥



『^{にほんしょき}日本書紀』や『^{こじき}古事記』（日本の神話などが書かれた日本最古の書物）の中で、^{じんむてんのう}神武天皇が熊野から^{やまとこく}大和国（奈良県）へ攻めていくとき、道案内をするために神が^{つか}遣わした三本足のカラスです。この^{やたがらす}八咫鳥は^{くまのなちたいしゃ}熊野那智大社に戻り、石になつたとの言い伝えもあり、^{けいだい}境内にはその像がおかれています。ちなみに世界中の神話の中で、カラスは太陽の使いとして登場しています。

また、^{やたがらす}八咫鳥は日本サッカー協会のシンボルマークにも使用されています。サッカー日本代表のユニフォームの胸のマークでおなじみですね。

3. 【熊野の神々と仏教】

【①熊野の神々】

くまのしんこう
熊野信仰の中心となる神社は、くまのほんぐうたいしゃ ほんぐう
熊野本宮大社（本宮市）・くまのはやたまたいしゃ しんぐう
熊野速玉大社（新宮市）・くまのなちたいしゃ なちかつうら
熊野那智大社（那智勝浦町）の三社です。それぞれくまのほんぐうたいしゃ けつみこのかみ
熊野本宮大社は家津御子神
(木・森の神=食べ物くまのはやたまたいしゃの神)、はやたまのかみ
熊野速玉大社は速玉神（ご神体は「ゴドビキ岩」、
くまのなちたいしゃ ふすみのかみ
熊野那智大社は夫須美神（ご神体は「那智なちの滝たき」）をまつっています。

また、こじき
『古事記』やにほんしょき
『日本書紀』に登場する日本を産んだ夫婦の神であるイザ
ナギノミコトやイザナミノミコト、ヤマタノオロチをたいじ
退治したスサノオノミコト
とも結び付けられています。



くまのほんぐうたいしゃ
【熊野本宮大社】



くまのはやたまたいしゃ
【熊野速玉大社】



くまのなちたいしゃ
【熊野那智大社】

【②仏教の伝来と山伏^{やまぶし}（修験者^{しゅげんじゃ}）】



東北歴史博物館 熊野信仰と東北展 より転載、加工

仏教が飛鳥時代^{あすか}の初め（538年）に日本に伝わり、奈良時代（8世紀）には朝廷の政策（東大寺の大仏や国分寺^{こくぶんじ}の建設など）も手伝い、日本中に広まっていきました。この頃から、1人で熊野の山にこもり、粗食^{そしょく}をしながら滝に打たれるなど、きびしい修行を積み重ねることで、超能力^{げんりき}（験力）を身につけようとする人々が数多く現れました。山伏^{やまぶし}（修験者^{しゅげんじゃ}）の始まりです。平安時代初め（9世紀）には、熊野三山が山伏の受け入れ先となり、修験者の組織も整備されました。

【③熊野の神々と仏教が結びつく】

平安時代になると神仏習合思想（日本の神々の正体は仏であるとする考え）が生まれました。これにより、本宮大社の正体は阿弥陀如来、速玉大社は薬師如来、那智大社は千手観音菩薩とされました。また、平安時代の中頃（10世紀）には末法思想（1052年から仏の力が及ばない世界が訪れ、混乱した世の中になるという考え）が広まります。この考えでは、現世（この世）での幸福は期待できず、来世（あの世）での幸福を願うしかありません。そこで、浄土信仰（阿弥陀仏を信じれば、死後、「極楽浄土（＝仏の住む世界）」へ行ける）が大流行します。

こうして熊野三社の神々と浄土信仰が結びつき、「生きている間は幸せに病気をせずに暮らしたい、死後も素晴らしいあの世に行きたい」という願いをかなえる仏が、熊野地方にまとめて存在することになったのです。人々はこの世の浄土を追い求め、熊野地方は「都に最も近い浄土」と考えられるようになりました。

	くまのほんぐうたいしや 熊野本宮大社	くまのはやたまたいしや 熊野速玉大社	くまのなちたいしや 熊野那智大社
主 神	けつみこのかみ 家津御子神 	はや たまのかみ 速玉神 	ふすみのかみ 夫須美神 
	<small>熊野社 通判古社名刺活字の第2より転載、加工</small>	<small>熊野社 通判古社名刺活字の第2より転載、加工</small>	<small>熊野社 通判古社名刺活字の第2より転載、加工</small>
ご神体 など	森の神・木の神(食 べ物の神)	ゴトビキ岩(男性の 神)	那智の滝(女性の神)
	スサノオノミコト	イザナギノミコト	イザナミノミコト
本地仏	あみだによらい 阿弥陀如来 	やくしによらい 薬師如来 	せんじゅかんのんぼさつ 千手観音菩薩 
	<small>平等院鳳凰堂 阿弥陀如来像 第一寺智社 熊野日本史協会 より転載、加工</small>	<small>神護寺 薬師如来像 第一寺智社 熊野日本史協会 より転載、加工</small>	<small>三十三間堂 千手観音像 小字院 日本歴史館 より転載、加工</small>
りやく ご利益	来世(あの世)での 幸福へ導く	苦しみや病気をいや す過去世(過去の行 い)の救済	現世(この世)での 幸せを授ける

【熊野の神々と仏】

じごく
地獄

じょうど
浄土

小学館 日本歴史館 より転載 加工

あみだにじゅうごぼさつらいごうず じごくぞうし
【阿弥陀二十五菩薩来迎図と地獄草子】

ふじわらのよりみち

藤原頼通が建てた、十円玉

にも描いてある「平等院鳳

凰堂」も浄土信仰に関係が

あるんだよ。



4. 【盛んになった熊野信仰】

【①有力者達の参詣】

熊野三山が広く信仰を集めるようになった直接的なきっかけは、平安時代から鎌倉時代（12～13 世紀）にかけて天皇家や貴族、有力な武士が参詣（お参り）を行ったからです。

平安時代の末、院政（位をゆずった天皇が上皇として行った政治）の頃には、浄土にあこがれた上皇が毎年のように熊野へのお参り（熊野御幸）を行ないました。白河上皇が12回以上、鳥羽上皇が33回以上、後鳥羽上皇が27回以上行ったことが確認されています。独裁者である上皇が多く、多くの貴族を従えて、毎年一ヶ月近くも都を離れることは、政治に大きな影響を与えました。

平清盛も熊野参詣を行なっていますが、彼の留守中に平治の乱（1159年、源氏と平氏の合戦）が起きています。



へいじ みなもとのよりとも
平治の乱で、源頼朝は

たいらのきよもり いず
平清盛に負けて、伊豆（静

岡県）へ流されるんだよ。



たいらの きよもり
平 清盛

武士として初めて政権をにぎる

さんけい
【参詣を行なった有力者】



ご と ぼ じょう こう
後鳥羽上皇

鎌倉幕府を倒すため承久じょうきゅうの乱をおこすが失敗

【②「^{あり}蟻の熊野もうで」】

「承久^{じょうきゅう}の乱^{らん}」(1221年)以後は、上皇^{じょうこう}の力が衰^{おとろ}えたこともあって、熊野御幸^{くまのごこう}はほとんどなくなりました。その頃からは武士・僧侶^{そうりよ}や庶民^{しょみん}のお参り^{まい}が多くなり
ます。身体障害者^{しんたいしょうがいしゃ}や病人^{まい}も熊野へのお参り^{まい}を行いました。

熊野三山の大きな特徴として、女性のお参り^{まい}が多かったことがあげられます。
当時の参拝^{さんぱい}の中心であった京都の比叡山^{ひえいざん}・和歌山の高野山^{こうやさん}・奈良の東大寺は、
「女人禁制^{にょにんきんせい}」^{さんぱい}と^{さんぱい}いって、女性^{さんぱい}の参拝^{さんぱい}を禁止^{まい}していました。これに対し熊野は女性^{さんぱい}
の参拝^{さんぱい}は自由^{まい}で、家族連れ^{まい}でお参り^{まい}することもできました。この自由な雰囲気^{まい}が
人々をひきつけた理由^{まい}の1つでしょう。

全国から押し寄せた参詣者^{さんけいしゃ}は、蟻^{あり}の行列^{あり}にも似た数珠^{じゆず}つなぎの長い列^{あり}をつくり、
その様子は「蟻^{あり}の熊野もうで」とよばれるほどにぎわいました。



北条社 熊野古社 熊野神社 熊野神社 熊野神社 熊野神社

くまのはやたまたいしゃ
【熊野速玉大社へのお参り (『一遍上人絵伝』より)】

いっぺんしょうにんえでん



右側の熊野川で、川下りをしているよ！左奥には神倉山も見えるね。

【③地方への広まり～山伏や比丘尼による布教】

熊野神社は全国各地に数多く建てられています。それは鎌倉～室町時代（12～16世紀頃）に熊野三社へお参りした人々が、地元かまくら むろまちに熊野神社を建てたからです。名取熊野三社もその1つです。

このように熊野信仰くまのしんこうが地方に広まった理由の1つとして、身分の低い山伏や熊野比丘尼びくにとよばれた女性達が、全国をめぐって熊野もうでを人々にすすめたことがあげられます。特に熊野比丘尼びくには、那智大社の境内なちたいしゃ けいだいや那智の滝なち たきを描いた図などを広げて「絵解き」えと（絵による解説かいせつ）をしたり、歌を歌ったりしながら、文字の読めない人々にも分かるように、熊野もうでのご利益りやく せんでんを宣伝しました。

熊野もうでが盛んになるにつれてお参りまいのしくみも整えられます。山伏は参詣者さんけいしゃ けわに険しい山道を案内すると共に、道中での修行の指導も行いました。熊野もうでの人数は南北朝時代なんぼくちょう（14世紀）から爆発的に増え、16世紀後半に最も盛んになりました。



東北歴史博物館 熊野信仰と東北展図録 より転載

くまのなちさんけいまんだらず
【熊野那智参詣曼荼羅図】



東北歴史博物館 熊野信仰と東北展図録 より転載

くまのかんじんじゅっかいまんたらす
【熊野観心十界曼荼羅図】



東北歴史博物館
熊野信仰と東北展図録 より転載

びく に え と
【比丘尼の絵解き】

5. 【名取老女の伝説】

昔々、陸奥国^{むつのくに}名取の里に1人の老女がおりました。その老女は熊野三山を深く信仰し、毎年^{きしゅう}紀州（現在の和歌山県）熊野にお参りをしていましたが、年をとりそれもできなくなりました。そこで、名取の里に熊野三社を建て、お祈り^{いの}を欠かさずに行なって過ごしておりました。

そのしばらく後、陸奥国^{むつのくに}松島へと旅に出る熊野の山伏^{やまぶし}が、旅の安全^{いの}を祈るため紀州熊野に行った時のことです。夢の中に老人があらわれ「陸奥国^{むつのくに}へ行くのなら名取に住む老女を訪ねなさい。彼女はとて^{しんじん}も信心深く、毎日私^{いの}にお祈りをささげてくれています。感謝^{かんしゃ}の印^{しるし}にこれを渡してください」とのお告げをされました。夢から覚めて枕元^{まくらもと}を見ると、「みちとおし としもいつしか おいにけり おもいおこせよ われもわすれじ（意味：紀州^{きしゅう}は遠く、年もとって来れないようですね。でも、毎年来てくれていたことは忘れませんよ）」と虫食いの跡^{あと}で書かれた、熊野の御神木^{ごしんぼく}であるナギの葉がおいてありました。

山伏^{やまぶし}はこれをもって名取の里へ行き、老女に夢のお告げを話しました。老女は感激^{かんげき}の涙を流し、紀州熊野をまねて建てた熊野三社へ山伏^{やまぶし}を案内^{やまぶし}しました。山伏のすすめに従い、老女が熊野の神^{いの}にお祈りをささげると、熊野の神の使者があらわれ、老女の頭に降りて光を放ちました。この奇跡^{きせき}を見ていた村人^{かんげき}達は感激し、それ以降彼らも熊野三社をまつり、老女の死後^{ほんでん}は本殿のそばに老女の宮^{みや}を建てたそうです。

名取に熊野三社が建てられ
たきっかけの伝説だね。名
取には「老女の^{みや}宮」の他に
「老女の^{はか}墓」もあるんだよ。



^{のう}「能」を完成させた^{ぜあみ}世阿弥
は、この伝説をもとにした
お話をつくっているよ。



【名取 熊野神社（旧新宮社）】



集英社「週刊吉社名刹巡拝の旅2」より転載

くまのはやたまたいしゃ
【熊野速玉大社のナギの木】

熊野堂神楽の

か く ら め ん

神楽面をつくろう!

しめきりのまい
注連切之舞



たねまきのまい
種播之舞



まさかきのまい
真榊之舞



名取市の熊野神社（旧新宮社）には、熊野堂神楽という神様にささげるおどりが伝えられています。毎年4月と10月のお祭りの時に、この神楽は行なわれています。

この神楽で使われている8面のうち、今回は3つが展示されています。3つの中から気に入ったお面を選んで、つくってみよう！





つくりかた



- ①色えんぴつで色をぬる。
(実物そっくりだけでなく、オリジナルの色でもかっこいいよ！)
- ②ハサミで切る。
(目の部分はミシン目が入っているけど、ハサミを使うと仕上げがていねいになるよ！)
- ③キリを使って、輪ゴムを通す穴をあける。
- ④輪ゴムを通して完成!

はさみやキリを使うときは気をつけてね!

